

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 212

津島遺跡 7

岡山県総合グラウンドテニスコート管理棟
(クラブハウス) 建築に伴う発掘調査

2007

岡山県教育委員会



1 調査区北壁土層断面（南から）



2 水田1南北畦畔検出状態（南から）

序

岡山県総合グラウンド内では、平成17年に開催した第60回国民体育大会以後、リニューアル工事が行われています。これにより、かつて岡山県体育館が所在していた敷地西部には、テニスコートが建設されることになりました。

岡山県教育委員会は、この事業のなかでも特に地下に影響のあるテニスコートの管理棟建築に関して、計画段階から埋蔵文化財の保護・保存をめぐる協議を関係部局と重ねてまいりました。その結果、埋蔵文化財に直接影響を及ぼす部分については、やむを得ず記録保存の措置を講じました。本書は、その発掘調査成果の報告書です。

収載している津島遺跡は、弥生時代から中世にかけての集落遺跡であり、その一部は国の史跡に指定されています。今回の発掘調査地は、指定地の南西に隣接しており、弥生時代前期の微高地や水田、弥生時代後期の掘立柱建物などが確認されました。

この報告書が学術研究に寄与するだけでなく、埋蔵文化財の保護・保存のために活用され、また地域の歴史を物語る資料として広く役立つならば幸いです。

最後に、発掘調査の実施や報告書の作成にあたっては、関係各位から多大な御協力を賜りました。記して厚く御礼申し上げます。

平成19年3月

岡山県古代吉備文化財センター

所長 松本和男

例 言

- 1 本書は、岡山県総合グラウンドテニスコート管理棟（クラブハウス）建築に伴い、岡山県教育委員会が岡山県土木部都市計画課の依頼を受け、岡山県古代吉備文化財センターが発掘調査を実施した津島遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 津島遺跡は、岡山県岡山市いずみ町2-1の岡山県総合グラウンド内に所在する。
- 3 発掘調査は、平成17年度に岡山県古代吉備文化財センター職員柴田英樹・正木茂樹が担当して実施したもので、調査面積は95㎡である。
- 4 本書に関係する石製品の石材鑑定については、鈴木茂之氏（国立大学法人岡山大学）に依頼し、有益な教示を得た。記して厚く御礼を申し上げる。
- 5 本書に関係する土壌の花粉・植物珪酸体分析については、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、報告文を掲載した。
- 6 本書の作成は、平成18年度に岡山県古代吉備文化財センターにおいて、柴田・正木が担当した。
- 7 本文の執筆は、第1章を岡本泰典、第2章を平井泰男・柴田、第3章を柴田・正木が担当し、文責は章及び節、遺構ごとの文末に示した。また、全体の編集は柴田が担当した。
- 8 遺物写真の撮影については、江尻泰幸が担当した。
- 9 本書収載の遺物および各種図面・写真等の記録は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325-3）に保管している。

凡 例

- 1 本書に記載された高度は、海拔高である。
- 2 グリッドの座標値および巻末の抄録に記載した経緯度は日本測地系に準拠し、各種遺構図の方位は平面直角座標第Ⅴ系の座標北である。
- 3 本書に掲載した地図のうち、第2図は国土地理院発行の地形図（1/25,000）『岡山北部』（平成9年）と『岡山南部』（平成9年）を複製して使用した。
- 4 土層断面図の土色、土器の色調は『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修 財団法人日本色彩研究所色票監修 2002年版）による。
- 5 各遺構・遺物実測図の縮尺率は、原則として下記のとおりである。
遺構 掘立柱建物：1/60 土壌：1/30
遺物 土器：1/4 石製品・金属製品：1/2、1/3
- 6 遺構・遺物の番号は、それぞれ種類別に通し番号を付している。
- 7 遺物番号は、土器が番号のみ、それ以外は材質にしたがって下記の記号を番号の前に付した。
石製品：S 金属製品：M
- 8 土器実測図の中軸線左右の白抜きは、小破片のため口径復元に不確実性があることを示す。
- 9 本書で用いる時代区分は、一般的な政治史区分に準拠し、それを補うために文化史区分や世紀を併用した。

目 次

巻頭図版

序

例言

凡例

目次

第1章 地理的・歴史的環境	1
第2章 調査の経緯と経過	5
第1節 発掘調査にいたる経緯	5
第2節 発掘調査および報告書作成の経過	6
第3節 発掘調査および報告書作成の体制	9
第3章 調査の概要	10
第1節 概要	10
第2節 遺構・遺物	12
第3節 小結	20
付載 津島遺跡の自然科学分析 (パリノ・サーヴェイ株式会社)	22
図版	
報告書抄録	

図 目 次

第1図 遺跡位置図 (1/1,500,000)	1	第10図 掘立柱建物 1 P 5 遺物出土状態 (1/30)・出土遺物 (1/4)	14
第2図 調査地周辺の地形と主要遺跡 分布図 (1/25,000)	2	第11図 土壌 1・2 (1/30)・ 土壌 1 出土遺物 (1/4)	15
第3図 パイル杭配置と調査区平面図 (1/200)	5	第12図 土壌 3・4 (1/30)・ 土壌 4 出土遺物 (1/4)	16
第4図 岡山県総合グラウンド内 発掘調査区配置図 (1/3,000)	7~8	第13図 溝 1 断面図 (1/30)・ 出土遺物 (1/4)	16
第5図 調査区平面図 (1/200)	10	第14図 水田 1 (1/200・1/30)	17
第6図 土層断面図 (1/60)	11	第15図 水田 2 断面図 (1/30)	17
第7図 遺構配置図 (1/200)	12	第16図 その他の遺物① (1/4・1/2)	18
第8図 掘立柱建物 1 (1/60)	13	第17図 その他の遺物② (1/4・1/3)	19
第9図 掘立柱建物 1 出土遺物 (1/4・1/3)	14		

巻頭図版目次

- 1 調査区北壁土層断面（南から） | 2 水田1南北畦畔検出状態（南から）

図版目次

- | | | |
|-----|----------------------------|------------------|
| 図版1 | 1 調査状況（北から） | 3 土壙1遺物出土状態（南から） |
| | 2 調査区西壁断面（南東から） | 図版4 |
| 図版2 | 1 掘立柱建物1（北東から） | 1 土壙2（南から） |
| | 2 掘立柱建物1P3断面（南東から） | 2 土壙3断面（南から） |
| | 3 掘立柱建物1P5遺物出土状態
（南東から） | 3 溝1（西から） |
| 図版3 | 1 土壙1北壁断面（南から） | 図版5 |
| | 2 土壙1東壁断面（西から） | 1 溝1断面（南西から） |
| | | 2 水田1南北畦畔（南から） |
| | | 3 水田2（東から） |
| | | 図版6 出土遺物 |

表目次

- | | |
|---------------------------|--------------------|
| 表1 文化財保護法に基づく文書一覧表..... 9 | 表4 金属製品一覧表.....21 |
| 表2 土器観察表.....20 | 表5 新旧遺構名対照表.....21 |
| 表3 石製品一覧表.....21 | |

第1章 地理的・歴史的環境

津島遺跡は、岡山県岡山市いずみ町の県総合グラウンドを中心に北東から南西に細長く伸びる微高地上に立地する、弥生時代前期から近代までの複合遺跡である。地形的には、岡山県三大河川の一つである旭川西岸の沖積平野に立地し、遺跡の内容としては集落および水田が主体をなす。

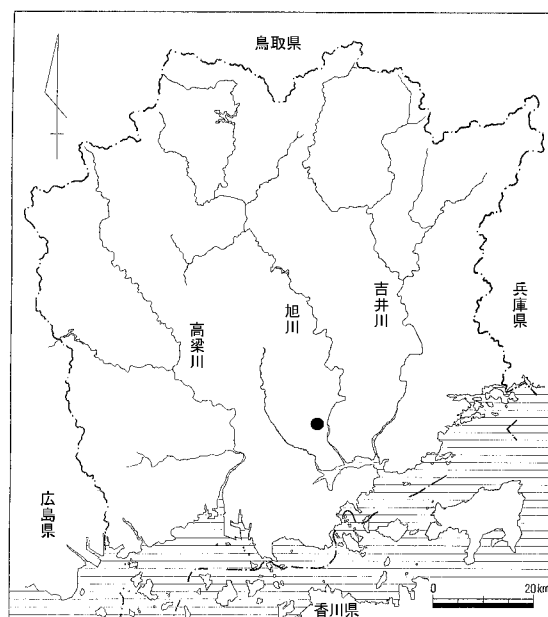
海水面が現在よりも最大で100m以上も低かった旧石器時代には、瀬戸内海は完全な陸地であった。岡山平野も例外ではなく、ボーリング調査の成果によると、旭川下流域では現地表下約17mに当時の地表面に相当する更新世の砂礫層が認められるという⁽¹⁾。その後、いわゆる縄文海進の開始に伴って陸地は海没し、縄文時代前期の海進最大時には現在の吉備高原南端部まで海岸線が入り込んだと考えられている。そこへ、吉備高原を流下してきた旭川をはじめとする大小の河川が流れ込み、吐き出される土砂は海底に堆積し、現在の岡山平野を形成していった。

また、近世以降は農地拡大を目的に干拓事業が推進され、平野はさらに南へと拡大していく。現在の広大な岡山平野のうち、市街地南東部に位置する操山山塊よりも南側の大部分は、こうした干拓事業によって出現した人工的な平野である。したがって、中世以前の生活の舞台は操山よりも北側の地域であり、時代を遡るほどその範囲は北側へと限定されることになる。

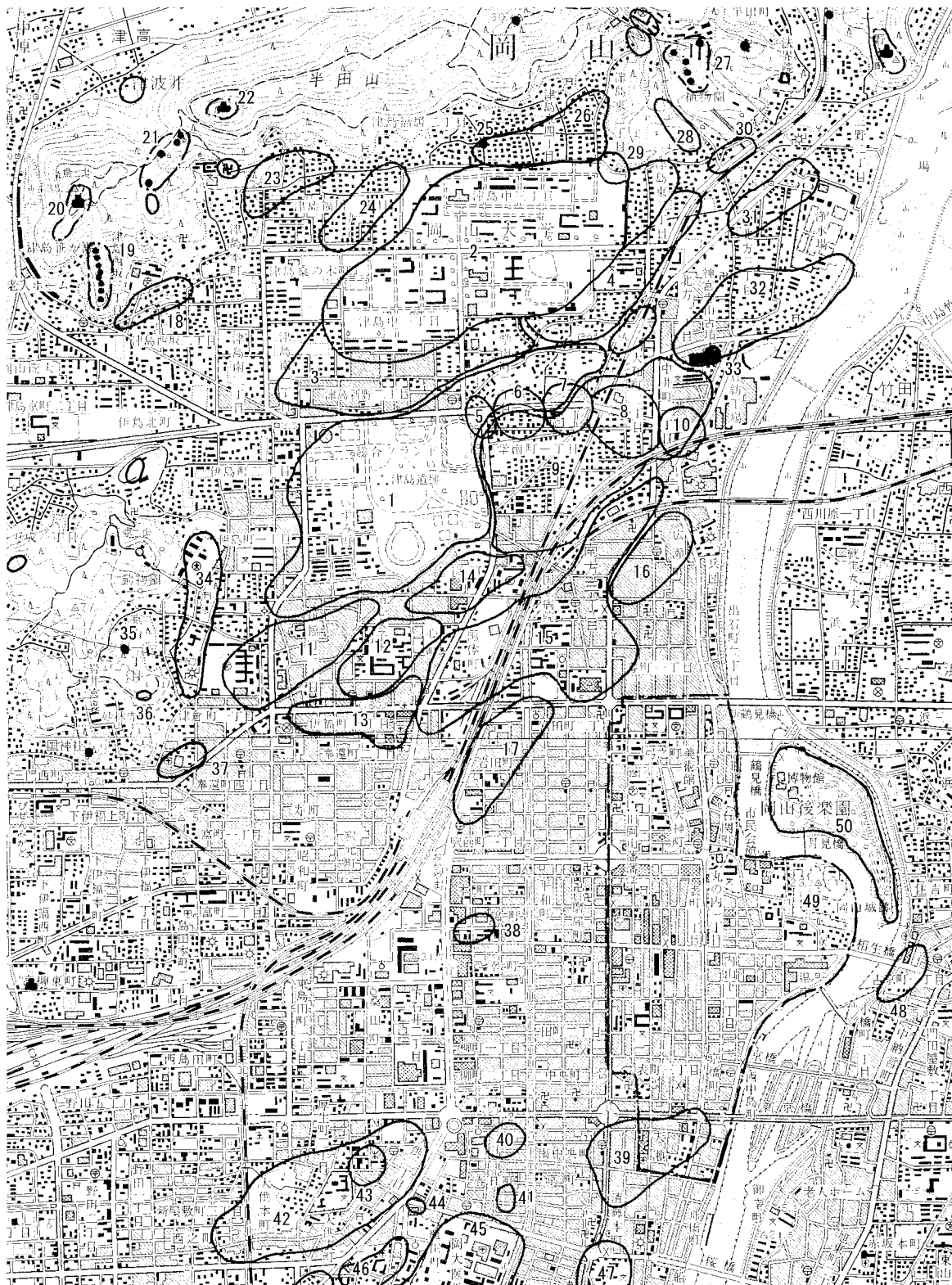
さて、岡山平野北端部近くに位置する津島遺跡周辺に着目すると、旭川の右岸にあって現在はほぼ平坦な地形であるこの一帯も、かつては第2図に示すように何条もの河川が網目状に分流し、その間に大小さまざまな規模の微高地が点在する複雑な地形であった。微高地の多くは、河川の流路に規制されて北東から南西に細長く伸びる島状を呈する。津島遺跡も、このような微高地上に展開した遺跡の一つであり、北隣の津島岡大遺跡と並んで近隣では最大級の面積を誇っている。

津島遺跡の周辺は、微高地上を中心として遺跡の稠密な地帯であるが、その大部分は弥生時代以降に属するものである。旧石器時代の遺跡は平野部では無論、北側の丘陵上でも未だ確認されておらず、やや内陸部に位置する田益田中遺跡において、縄文時代晩期の河道に混入する形でナイフ形石器が出土している程度である⁽²⁾。

縄文時代に入ると、平野部への人々の進出が活発化し、遺跡数も徐々に増加していくが、津島遺跡周辺では北側の半田山南麓に分布が集中する。形成時期が前期に遡る遺跡として、津島岡大遺跡と朝寝鼻貝塚が挙げられる。朝寝鼻貝塚では、最近前期の層からイネのプラントオパールが検出され、稲作の開始時期との絡みで注目を集めている⁽³⁾。ただ、朝寝鼻貝塚や津島岡大遺跡などでも、本格的な定住は後期に開始される。津島岡大遺跡では炉や貯蔵穴といった集落に伴う遺構が検出された⁽⁴⁾。遺跡の拡



第1図 遺跡位置図 (1/1,500,000)



- 1 津島遺跡 2 津島岡人遺跡 3 津島新野遺跡 4 津島江道遺跡 5 北方下沼遺跡 6 北方横田遺跡 7 北方中溝遺跡 8 北方地藏遺跡
- 9 北方上沼遺跡ほか 10 北方藪ノ内遺跡 11 上伊福遺跡・伊福定回前遺跡 12 上伊福遺跡 13 上伊福(立化)遺跡 14 絵図遺跡
- 15 南方遺跡ほか 16 広瀬遺跡 17 集落跡 18 散布地 19 七つ坑古墳群 20 烏丸城跡 21 都月坂墳墓群 22 半田山城跡
- 23 津島福居遺跡 24 散布地 25 お塚様古墳 26 津島東遺跡 27 本松古墳群 28 散布地 29 朝寝墓貝塚 30 鎌田遺跡
- 31 三野宮之段遺跡 32 北方長田遺跡 33 神宮寺山古墳 34 上伊福西遺跡・尾針神社南遺跡 35 津倉古墳 36 妙林寺遺跡
- 37 津倉遺跡 38 散布地 39 下瀬遺跡 40 人供中道遺跡 41 散布地 42 散布地 43 人供東浦遺跡 44 散布地 45・46 鹿田遺跡
- 47 新道遺跡 48 散布地 49 岡山城跡 50 後樂園

第2図 調査地周辺の地形と主要遺跡分布図 (1/25,000)

大・発展は晩期にも続き、遺構・遺物の量も増加していく。津島遺跡でもトレンチ調査によって遺構・遺物がわずかながら検出され、人間の活動が晩期にまで遡ることが確認された⁽⁵⁾。しかし、本格的な定住であったかは定かではない。

弥生時代に入ると、微高地縁辺部の低位部で本格的な稲作が開始される。津島江道遺跡では縄文時代晩期末（弥生時代早期）とされる水田の検出が報告されているが、疑問視する意見もある⁽⁶⁾。前期に至ると水田面積は飛躍的な拡大を見せ、津島遺跡のほか津島岡大遺跡や北方下沼・地藏・横田遺跡などにも水田が拓かれていく。水田面は畦畔で区画され、用排水路も整備されるなど当時の技術水準がうかがわれる。また、水田層内からは稲作の指標とされるイネのプラントオパールも検出されている。ただ、これらの「稲作跡」がそのまま現在の認識でいう「水田」に該当するか否かは近年疑問視する意見もあり、今後さらなる検討が必要であろう⁽⁷⁾。一方、集落は津島遺跡で微高地上の堅穴住居・掘立柱建物などが検出され、遺物も多数出土するなど⁽⁸⁾存在は確実であるが他の遺跡では明確な遺構は少なく、水田経営の母体となるべき集落の様相が今一つ明らかでない。

弥生時代中期の遺跡は、津島遺跡よりも南側を中心に分布する傾向がみられる。南方遺跡や上伊福九坪遺跡では多くの遺構・遺物が出土し、集落域の拡大がうかがわれる。特に南方遺跡においては、微高地上で堅穴住居・土壙墓などの遺構が検出されたほか、河道から精巧な加工の施された木製品が多数出土し、石器未製品などの存在から石器製作も行われたことが推測される⁽⁹⁾。津島遺跡では、中葉から後葉にかけて数か所に集落が形成されている。この他、北方中溝遺跡⁽¹⁰⁾や津島遺跡では水田域も検出されているが、削平等の影響もあるのか、前期ほどの広がりは見られない。

弥生時代後期に至ると、沖積作用の進展により微高地間の低位部や河道が埋没し、微高地の面積はさらに拡大し、立地する集落も一層の発展をみせる。この時期の遺構は周辺の微高地では普遍的に検出される。津島遺跡では多数の堅穴住居のほか、河道内から後半期の建築部材をはじめとする大量の木製品が出土している⁽¹¹⁾。津島江道遺跡では、後期前半から古墳前期までの集落が検出され、多くの住居から獣骨や骨製品が出土することから骨角器製作集団の集落と考えられている⁽¹²⁾。南方遺跡では土器棺や土壙墓が検出され、中期同様集落の周辺に形成された墓域がみられる。津島遺跡の西側では伊福定国前遺跡が挙げられる⁽¹³⁾。南部に目を向けると、天瀬遺跡や鹿田遺跡で中期末から後期にかけて集落が形成される。鹿田遺跡では後期を中心とする集落が存在し、多数の製塩土器の出土から製塩に関わる集落と推測されている⁽¹⁴⁾。

弥生後期末から古墳時代になると、周辺の丘陵上に墳丘墓や古墳の築造が開始される。半田山に築かれた20×16mの長方形をなす都月坂2号墳丘墓⁽¹⁵⁾を嚆矢とし、七つ埴1号墳、都月坂1号墳や京山の津倉古墳などの前期古墳が続く。七つ埴1号墳は墳長48mの前方後方墳で、前方部・後方部の両方に堅穴式石槨を有するが、後方部石槨は破壊が著しく、前方部石槨は小規模で副葬品を伴わない⁽¹⁶⁾。都月坂1号墳は墳長33mを測る前方後方墳であり、出土した特殊器台形埴輪・特殊壺形埴輪が最古段階の埴輪として「都月型」と命名されている⁽¹⁷⁾。一方平野部では、津島遺跡の北東に位置する神宮寺山古墳が特筆される⁽¹⁸⁾。墳長約150mを測り、4世紀末から5世紀前半頃の築造と推定され、旭川西岸地域を掌握した首長の墓と考えられる。中期の古墳としては半田山に墳長約65mの前方後円墳である一本松古墳などがあるが概して少なく、後期に至ると目立った古墳は周辺には築かれなくなる。

古墳時代の集落は、各遺跡において弥生後期から引き続き営まれたものが多い。通常の集落のほか、津島江道遺跡では後半期の集落内に鍛冶炉が検出され、鉄器生産に関与する集落との位置づけが

なされている⁽¹⁹⁾。上伊福西（尾針神社南）遺跡では須恵器埋納土壌が検出され、状況から地鎮に関わる遺構と考えられる⁽²⁰⁾。

古代以降、津島遺跡とその周辺の大部分は耕作地としての歴史を歩むこととなる。古代の条里関連と思われる溝が津島遺跡をはじめ周辺の各遺跡で確認されている。津島江道遺跡では総柱建物の存在や硯の出土などから官衙的施設の存在がうかがわれる⁽²¹⁾。集落の実態は未解明な部分が多いが、「鹿田荘」に比定される鹿田遺跡では建物や井戸などが検出されている⁽²²⁾。中世に至ると鹿田遺跡などで集落もみられるが、広範囲な水田層の存在から平野部の水田化がさらに進展したものと考えられる。この状況は、近世に入り岡山城とその城下町が建設された後も変わることはなかった。

こうして穀倉地帯となった津島の地は、近代に入り大きな転換点を迎える。明治40年（1907年）、旧陸軍第17師団の設置に伴って、津島遺跡一帯は大規模な造成により陸軍の練兵場へと変貌を遂げた。また周辺でも宅地化が進行し、かつての水田景観は徐々に失われてゆく。戦後しばらくの間は放置されていたが、昭和23年（1948年）には津島運動公園に決定され、以降は公園として整備され現在に至っている⁽²³⁾。

なお、この章は註8文献「津島遺跡2」の第1章を基調とし、一部を改変したものである。（岡本）

註

- (1) 『岡山県史 自然風土』 岡山県 1983
- (2) 「田益田中（国立岡山病院）遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』141 岡山県教育委員会 1999
- (3) 「岡山市津島東3丁目 朝寝鼻貝塚発掘調査概報」『加計学園埋蔵文化財調査室発掘調査報告』2 加計学園埋蔵文化財調査室 1998
- (4) 「津島岡大遺跡10」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』第14冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1998
- (5) 「津島遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』137 岡山県教育委員会 1999
- (6) 神谷正義「最古の水田」『吉備の考古学的研究』(上) 山陽新聞社 1992、平井勝「弥生時代への移行」同前
- (7) 高橋護「縄文時代中期稲作の探求」『堅田直先生古希記念論文集』 1997
- (8) 「津島遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』151 岡山県教育委員会 2000
「津島遺跡3」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』160 岡山県教育委員会 2001
- (9) 「上伊福・南方（済生会）遺跡（南蓮田調査区Ⅰ・Ⅱ）」『岡山市埋蔵文化財調査の概要 1994・1995年度』 岡山市教育委員会 1996・1997
- (10) 「北方下沼遺跡・北方横田遺跡・北方中溝遺跡・北方地蔵遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』126 岡山県教育委員会 1998
- (11) 「津島遺跡4」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』173 岡山県教育委員会 2003
- (12) 「津島江道遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告』18 岡山県教育委員会 1988
- (13) 「伊福定国前遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』125 岡山県教育委員会 1998
- (14) 「鹿田遺跡Ⅰ」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』第3冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1988
- (15) 近藤義郎「都月坂二号弥生墳丘墓」『岡山県史 考古資料』 岡山県 1986
- (16) 七つ坵古墳群発掘調査団編『七つ坵古墳群』 1987
- (17) 近藤義郎「都月坂一号墳」『岡山県史 考古資料』 岡山県 1986
- (18) 『前方後円墳集成 中国・四国編』 山川出版社 1991
- (19) 「津島江道（岡北中）遺跡」『岡山市埋蔵文化財調査の概要 1996年度』 岡山市教育委員会 1998
- (20) 「尾針神社南遺跡」『岡山市埋蔵文化財調査の概要 1995年度』 岡山市教育委員会 1997
- (21) 註12に同じ。
- (22) 註14に同じ。
- (23) 『岡山県史 近代Ⅰ』岡山県 1985、『岡山市史 戦災復興編』岡山市役所 1960

第2章 調査の経緯と経過

第1節 発掘調査にいたる経緯

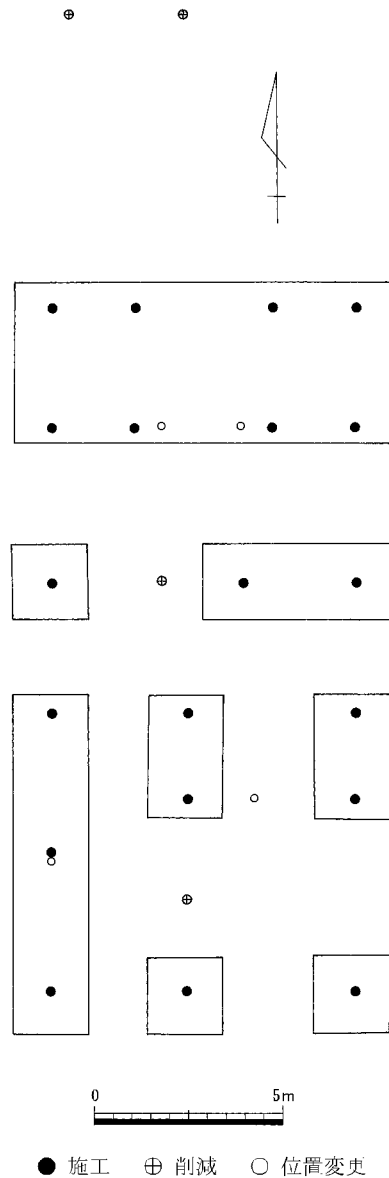
新岡山県体育館（桃太郎アリーナ）建設地に所在していたテニスコートおよびその管理施設については、平成14年度に策定された岡山県総合グラウンドリニューアル計画において旧体育館跡地に機能回復することとなっていたが、新施設の建設にあたっては遺跡に影響を与えないことで岡山県教育庁文化財課と事業主体である岡山県土木部都市計画課は協議し合意していた。

ところが、平成17年11月になって都市計画課から、管理棟（クラブハウス）建築予定地でボーリング調査を実施したところ、他地域に比べて著しく地盤が弱い結果が出たため、耐震構造とするためには遺跡に影響を与えない「ベタ基礎工法」ではなくパイル杭を打たなければならないので、遺跡の取り扱いについて協議したいとの申し出があった。

これに対し文化財課は、建築予定地周辺は遺跡が存在していることが確認調査の結果明らかとなっていることから、①建築場所を遺跡への影響が少ない南西隅に移転すること、②設計変更によって杭を打たなくて済むよう関係機関と再検討することを要求した。しかしながら、管理棟は既にあった施設の機能回復であり計画中止はできないこと、およびテニスコート運営上の利便性と耐震構造という理由から、面的な掘削は造成土内で止めるものの当初計画地でパイル杭を打たざるを得ないという返答があったため、文化財課は遺跡への影響を極力少なくする観点からパイル杭の数の削減を要求した結果、当初案より4本杭を減らした実施設計が平成18年1月に最終案として提示された。

これを受けて、文化財課は最終的な判断として、管理棟建築前に必要最小限の発掘調査によって記録保存を実施し、重要な遺構が発見された場合は再協議することとした。発掘調査範囲については、パイル杭の場所を中心に杭によって影響を受ける範囲と調査に必要な幅を2mと定め、原則的に2m程度以上間隔がある場合は調査対象からはずすこととした。

(平井)



第3図 パイル杭配置と調査区平面図(1/200)

第2節 発掘調査および報告書作成の経過

1 発掘調査の経過

今回の調査地点は、岡山県総合グラウンド内の中央西寄りで、平成11年に行われた確認調査のT40の西30m、T43の北20mに位置する。

調査地点は工事区域内であり、工事と発掘調査双方の安全を確保するため作業エリアを分離する必要がある。また工事区域の端でもあり、運動公園という性格上、一般利用者の安全を考慮して条件整備の一環として調査区の周囲にフェンスを設置した。調査時の地表面下約1mのアスファルト舗装およびそれに関する砕石、練兵場に関する造成土、その直前の水田耕作土については、重機を使用して掘削を行った。一方、調査で生じる残土は、ベルトコンベヤーで調査区外へ排出したが、作業エリアが限定されていたため、適宜工事区域内の所定の場所へ車両により移動した。休憩場所及び資機材管理については、油庫1基とテント2張りで対応した。その際、都市公園法に基づく申請を行い、占用許可を受けた（平成18年2月3日付 岡山県指令備前局建第2783号）。

発掘調査は、調査員2名で実施した。海拔約240cm、古代～中世水田層の掘り下げから調査を開始し、海拔約210cmで弥生時代後期の遺構を確認した。また、海拔約155cmでは、弥生時代前期の微高地と遺構を検出し、そこから約30cm低い水田部では畦畔を確認した。さらに部分的に海拔約100cmまで掘り下げたが、遺構および遺物が認められなかったため、調査を終了した。

なお、調査地点および周辺は、テニスコートやその管理棟、駐車場が建設されるが、調査時の地表面から30cm程度高く造成されていることを付記しておく。

発掘調査日誌抄

平成18年

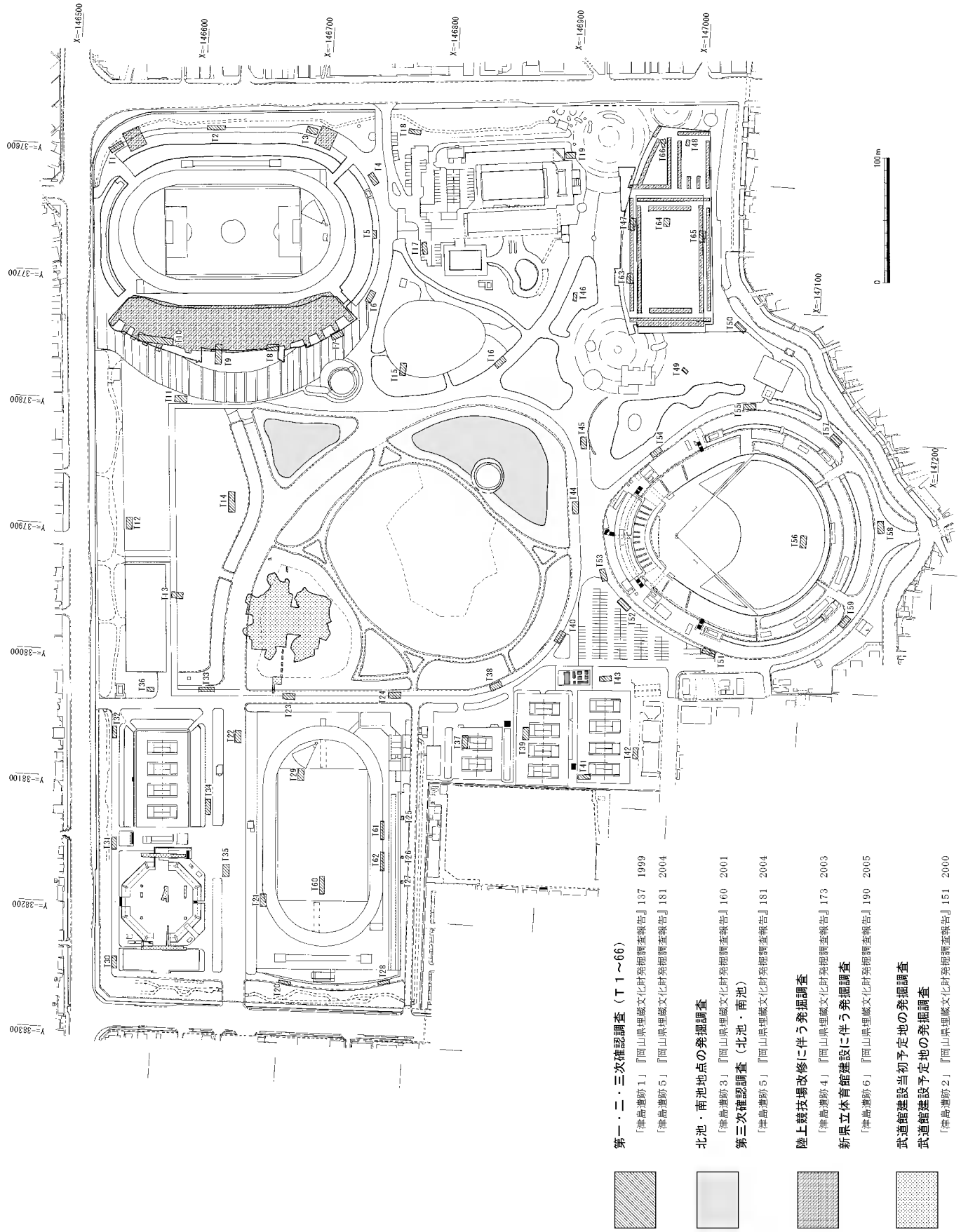
2月13日（月）発掘調査開始（資材搬入等）	3月10日（金）弥生時代（前期）遺構検出
2月14日（火）側溝・包含層掘り下げ	3月13日（月）津島遺跡史跡整備委員会委員の視察
2月21日（火）古代～中世遺構検出	3月17日（金）資材搬出
2月22日（水）弥生時代（後期）遺構検出	3月20日（月）発掘調査終了
3月8日（水）弥生時代（前期）水田検出	








2 報告書作成の経過

報告書の作成は、調査に引き続き平成18年度に岡山県古代吉備文化財センターで作業を行った。これについては、専従できる調査員および期間は付与されていなかったため、通常業務の合間などを利用して作業を行った。

遺構については、実測図を再点検しながら個別遺構図と全体図の下図を作成し、トレースを行った。

遺物整理については、発掘調査時に土器4箱の洗浄が完了していたが、注記は行われていなかったため、その作業から始めた。その間、実測を要する遺物の選別を行い、復元作業や実測作業、写真撮影を進めた。また金属製品については錆の除去等も行った。土器は破片が多いが、実測した42点すべてを掲載した。石製品5点、金属製品1点についても実測したものをすべて掲載した。（柴田）



- 
第一・二・三次確認調査 (T1~66)
 『津島遺跡1』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』137 1999
 『津島遺跡5』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』181 2004
- 
北池・南池地点の発掘調査
 『津島遺跡3』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』160 2001
- 
第三次確認調査 (北池・南池)
 『津島遺跡5』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』181 2004
- 
陸上競技場改修に伴う発掘調査
 『津島遺跡4』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』173 2003
- 
新県立体育館建設に伴う発掘調査
 『津島遺跡6』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』190 2005
- 
武道館建設当初予定地の発掘調査
武道館建設予定地の発掘調査
 『津島遺跡2』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』151 2000
- 
テニスコート管理棟 (クラブハウス) 建設に伴う発掘調査

第4図 岡山県総合グラウンド内発掘調査区配置図 (1/3,000)

第3節 発掘調査および報告書作成の体制

本書掲載の津島遺跡の発掘調査は、平成17年度に行い、平成18年度に遺物整理・報告書作成を実施した。以下に調査・報告書作成の体制を記す。(柴田)

平成17年度

岡山県教育委員会

教育長 宮野 正司

岡山県教育庁

教育次長 釜瀬 司

文化財課

課長 芦田 和正

参事 田村 啓介

総括副参事(埋蔵文化財班長) 平井 泰男

主任 小林 利晴

主事 金出地敬一

岡山県古代吉備文化財センター

所長 松本 和男

次長(総務課長) 内田 猛

参事 平松 郁男

参事 高畑 知功

<総務課>

総括副参事(総務班長) 若林 一憲

主任 小川 紀久

<調査第一課>

課長 岡田 博

総括副参事(第一班長) 光永 真一

主査 柴田 英樹(調査担当)

主査 正木 茂樹(調査担当)

平成18年度

岡山県教育委員会

教育長 門野八洲雄

岡山県教育庁

教育次長 神田 益穂

文化財課

課長 高畑 知功

参事 田村 啓介

総括副参事(埋蔵文化財班長) 光永 真一

主任 小林 利晴

主任 金出地敬一

岡山県古代吉備文化財センター

所長 松本 和男

次長(総務課長) 安西 正則

参事 岡田 博

副参事 中島 謙次

<総務課>

総括副参事(総務班長) 若林 一憲

主任 小川 紀久

<調査第一課>

課長 中野 雅美

総括主幹(第一班長) 大橋 雅也

主任 弘田 和司

主任 柴田 英樹(報告書担当)

主任 正木 茂樹(報告書担当)

調査協力者

高橋 照彦(国立大学法人大阪大学)

表1 文化財保護法に基づく文書一覧表

埋蔵文化財発掘の通知(法第94条第1項)

文書番号日付	種類および名称	所在地	面積(m ²)	目的	通知者	期間	主な指示事項
教文埋 第1100号 H18.1.25	生産遺跡 津島遺跡	岡山市いづみ町2-1	150	公園造成	岡山県知事 (都計第801号 H18.1.23)	許可日~ H18.10.31	発掘調査

埋蔵文化財発掘調査の報告(法第99条)

文書番号日付	種類および名称	所在地	面積(m ²)	原因	報告者	担当者	期間
岡吉調 第5023号 H18.2.13	集落跡・生産遺跡 津島遺跡	岡山市いづみ町2-1	95	その他建物	岡山県古代吉備文化財 センター所長	柴田英樹・正木茂樹	H18.2.13~ H18.3.24

遺物発見通知(法第100条第2項)

岡山県文書番号日付	物件名	出土地	出土年月日	発見者	土地所有者	現保管場所
教文埋 第1330号 H18.3.23	土器・石器・金属器 計4箱	岡山市いづみ町2-1 津島遺跡	H18.2.13~ H18.3.20	岡山県教育委員会 教育長 宮野正司	財務省	岡山県古代吉備文化財センター

第3章 調査の概要

第1節 概要

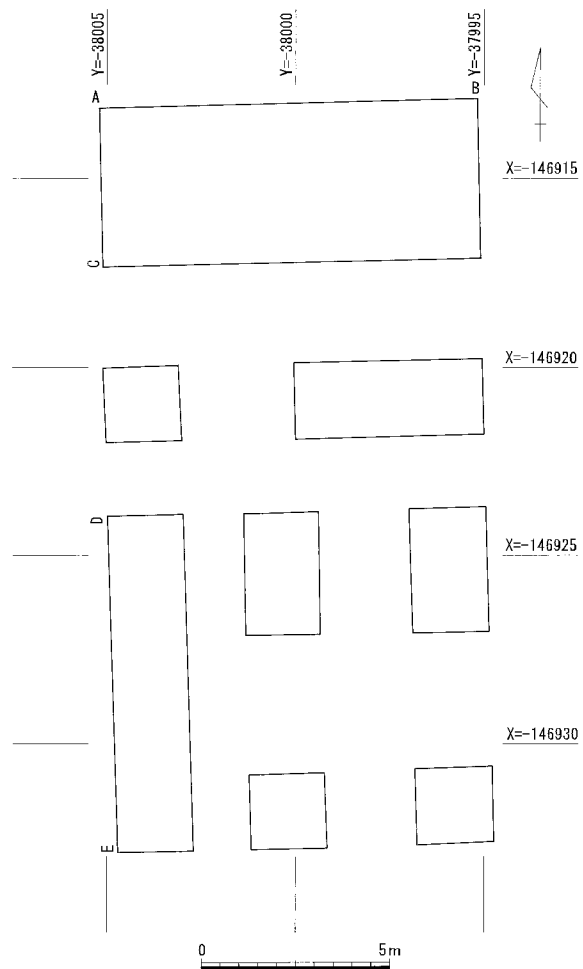
調査地点は、平成11年に行われた確認調査T40の西30m、T43の北20mに位置する。その確認調査成果では、当該地点に弥生時代前期の水田が存在する可能性は非常に高く、今回の調査でも同一と見られる水田を確認した。また、調査地南西の野球場からT40にかけて遺構が確認されていた弥生時代後期～古墳時代の集落に関しては、弥生時代後期の掘立柱建物や土壘などが確認された。古代以降については、従来の見解と同様に水田層が認められ、さらに今回は東西方向の畦畔状の高まりが検出された。旧陸軍練兵場の造成土で埋められた東西方向の溝も近くで確認され、両者とも条里との関連が指摘される。

次に調査地点の基本層序であるが、調査区北壁と西壁の土層断面を第6図に示した。

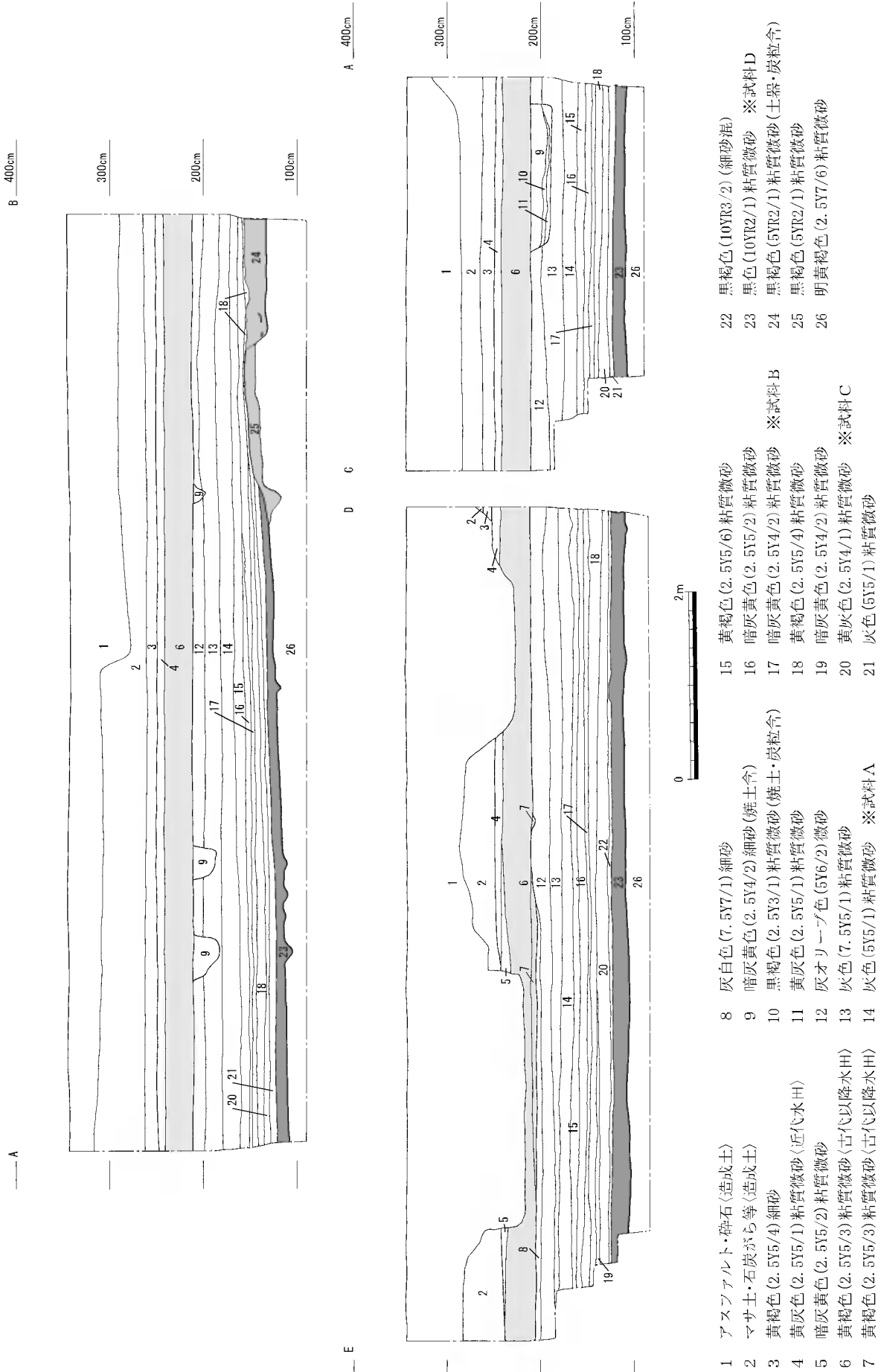
第1層はグラウンド関連の造成土で、第2層が旧陸軍練兵場に関わる造成土と考えられる。この直下の第3層は砂層で、第4層の水田を覆っている。海拔242cm以下の第6層が古代以降の水田層とみられ、間には少なくとも2層の明瞭な鉄分沈着が認められる。

海拔212cmで弥生時代後期の遺構が確認される。この基盤となっている第12層は特徴的な砂層である。以下、第17層まで水平堆積が認められるが、土壌サンプルを採取した第14・17層は比較的黒味が強い。海拔156cmでは、調査区東側に弥生時代前期の微高地と遺構が検出され、西に向かって約30cm低くなる部分が水田域となることがわかった。水田層と思われる層は第19・20・23層であるが、間に存在する第21・22層は、砂層あるいは砂質が強く、畦畔検出の手がかりとなった。第23層が当遺跡で広く認められる弥生時代前期の水田層である。この層は下層になるに従って漸次的に黒味が弱くなるため、ここでは明確な2つの層として示していない。

第25層は、色調が水田の第23層と似ているが、それにくらべると砂質が強い。また遺構埋土



第5図 調査区平面図 (1/200)



第6図 土層断面図 (1/60)

である第24層との区別は困難であった。なお、この下面は、第26層へ陥入する状態を呈しており、図示した以上に凹凸が著しい。第26層が地山とされる層で、部分的に海拔約100cmまで掘り下げたが、遺構および遺物は認められなかった。(柴田)

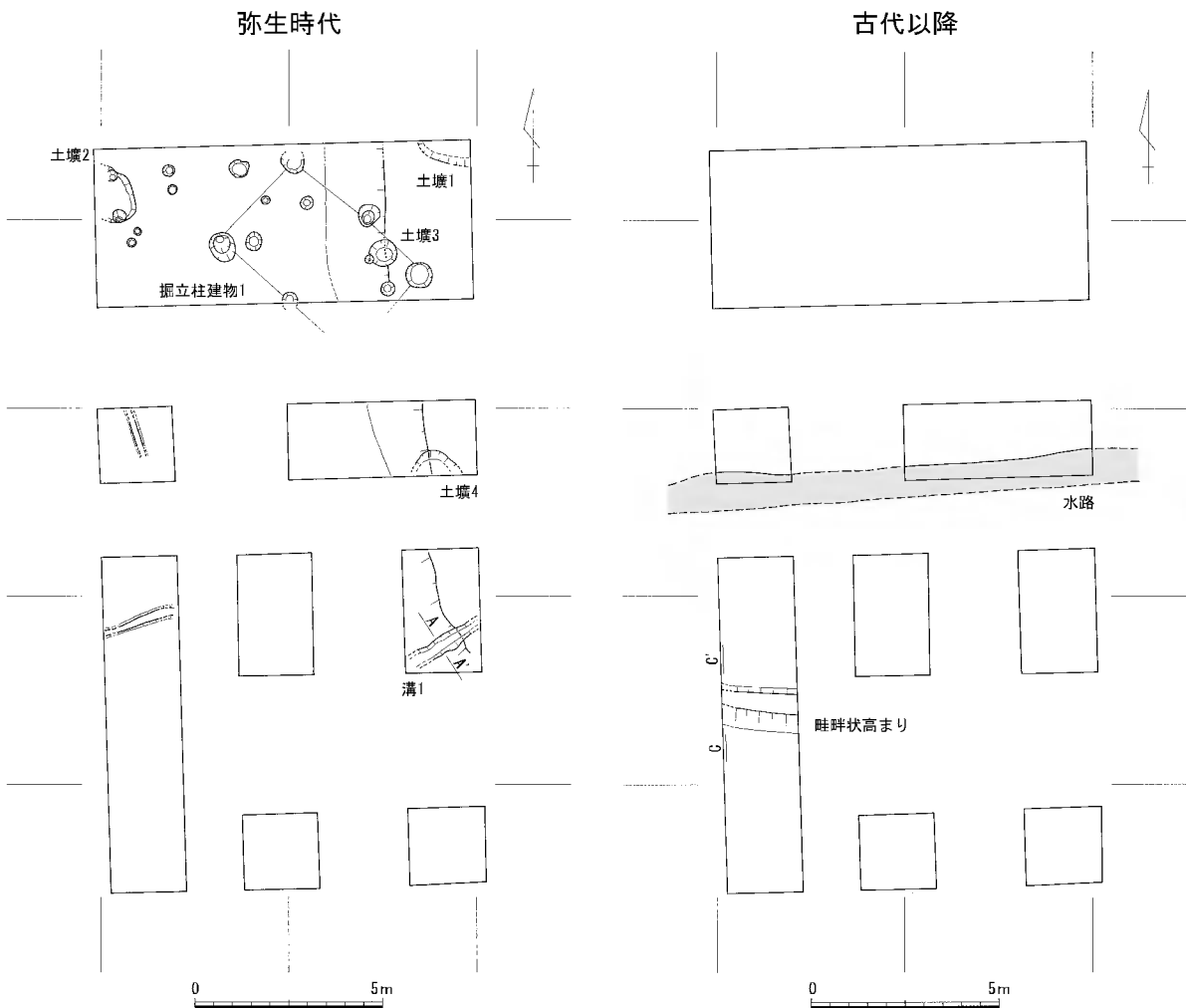
第2節 遺構・遺物

検出された遺構は、弥生時代前期の土壙1基と水田、弥生時代後期の掘立柱建物1棟、土壙4基、溝1条、柱穴10個、古代～中世と考えられる水田である。出土遺物の中には、古墳時代の遺物も含まれているが、この時期の遺構は確認できなかった。

弥生時代前期では、調査区の東端において、水田面より約30cm高い微高地が確認され、そこに土壙が検出できた。この周囲の土層からは土器片などが比較的多く出土している。この南西にひろがる水田では、わずかであるが、南北方向と東西方向の畦畔が確認できた。

弥生時代後期では、調査区の北東部分を中心に掘立柱建物、土壙、溝などが検出された。溝を境にして、北側に一定の集落遺構群がひろがるものと考えられる。

古代以降では、調査区全面で水田層が認められ、一部で東西方向の地形改変部分が認められた。こ



第7図 遺構配置図 (1/200)

れについては、畦畔状の高まりとして報告する。また、ここでは遺構番号を付与しないが、旧陸軍練兵場の造成土で埋められた東西方向の溝が調査区中央で確認され、条里との関連が指摘される。

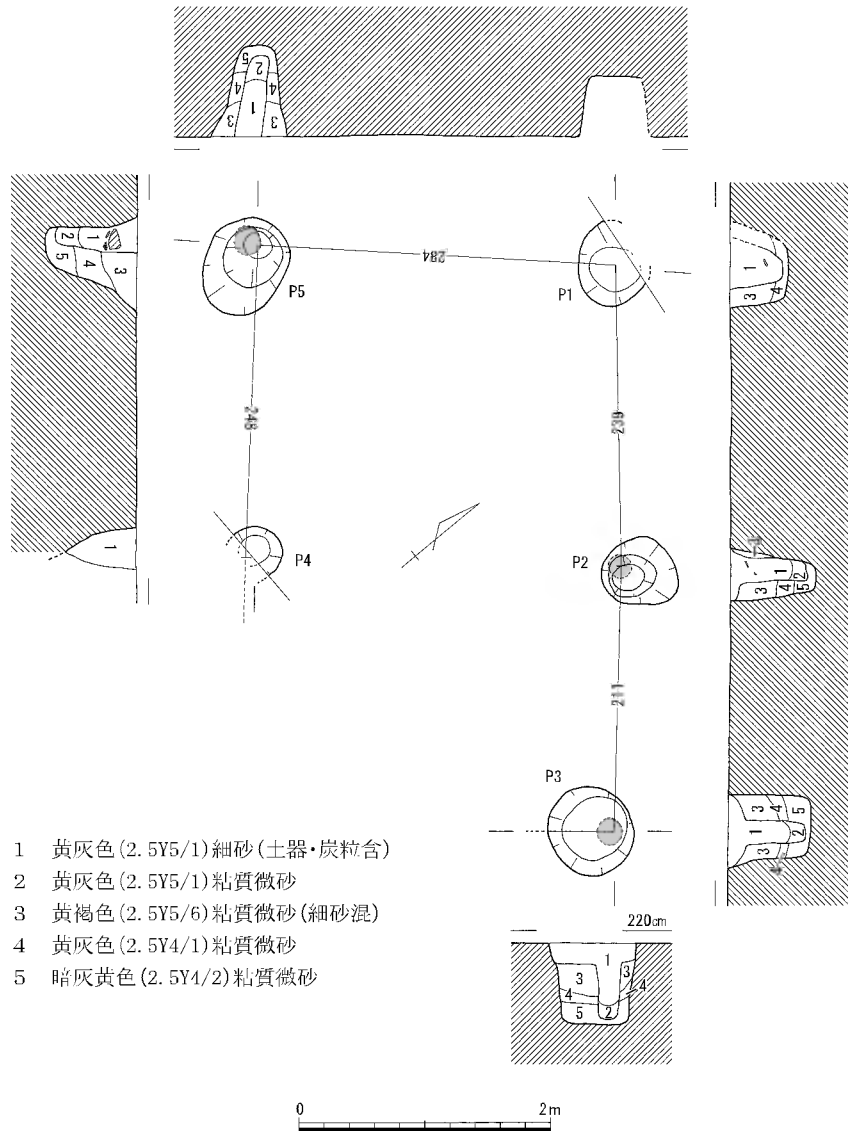
遺物については、土器42点、石製品5点、金属製品1点を掲載した。(柴田)

1 掘立柱建物

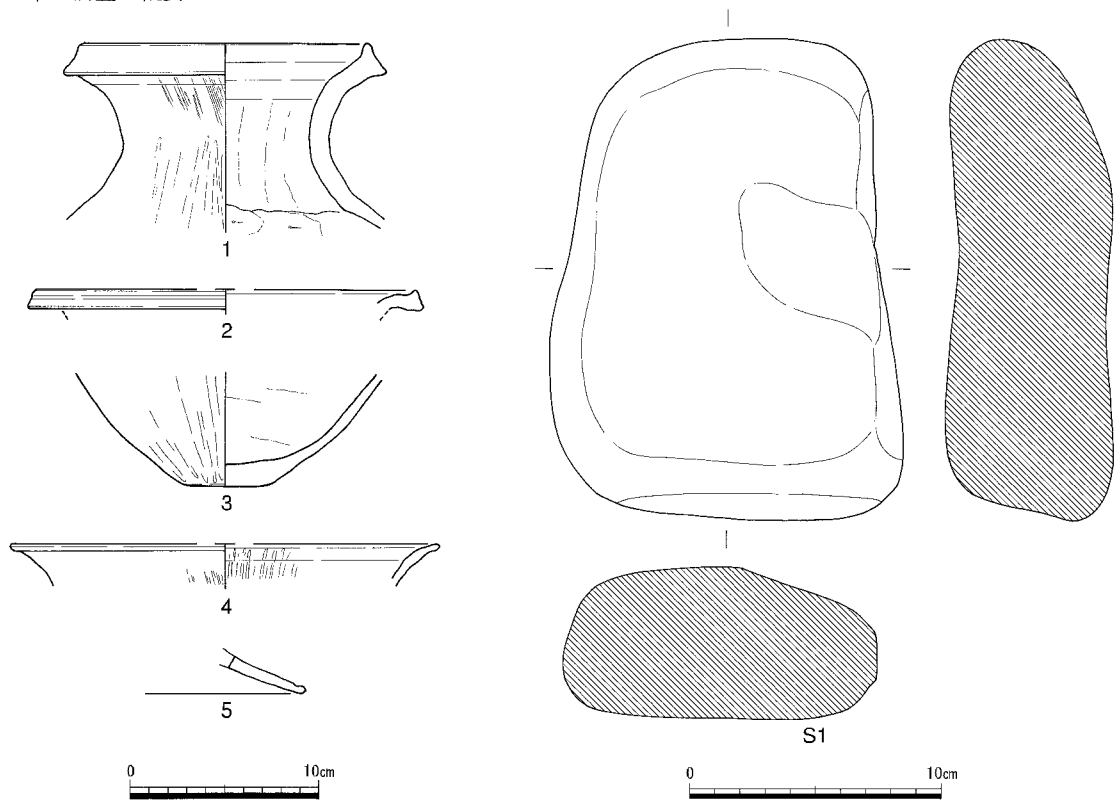
掘立柱建物1 (第7~10図、図版2・6)

調査区北部に位置する2×1間の掘立柱建物である。南隅の柱穴は調査区外に存在すると考えられる。棟方向は北西-南東で、座標北に対して西偏50°である。柱穴掘り方の平面形は、おおむね円形を呈し、径60~80cmを測る。検出面からの深さは70cm前後であるが、P1は比較的浅く46cmである。柱穴内埋土は分層が可能で、P2・3・5では、径20cm程度の柱痕跡が確認された。P1・4の第1層もこれに相当すると考えられる。

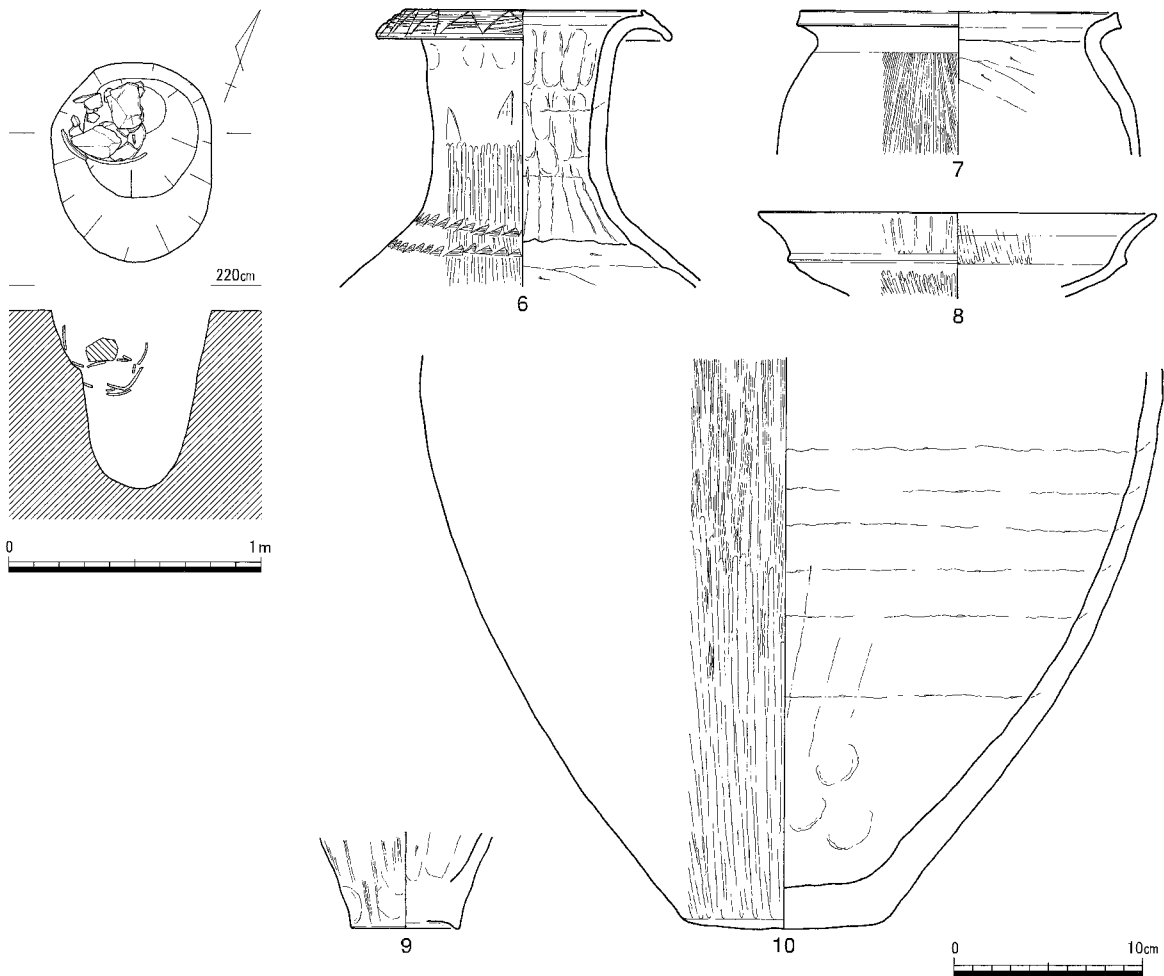
各柱痕跡内からは、遺物が出土している (P1-壺3・S1、P2-壺1、P3-甕2・高杯4・



第8図 掘立柱建物1 (1/60)



第9図 掘立柱建物1 出土遺物 (1/4・1/3)



第10図 掘立柱建物1 P 5 遺物出土状態 (1/30) ・ 出土遺物 (1/4)

5)。また、P5の柱痕跡中からは、角礫とともに壺6・10、甕7・9、高杯8などが出土しており、断面図には表われていないが、柱痕跡の下部まで土器片が入り込んでいた。

これらの遺物から、遺構の時期は弥生時代後期前葉と思われる。(柴田)

2 土壙

土壙1 (第7・11図、図版3・6)

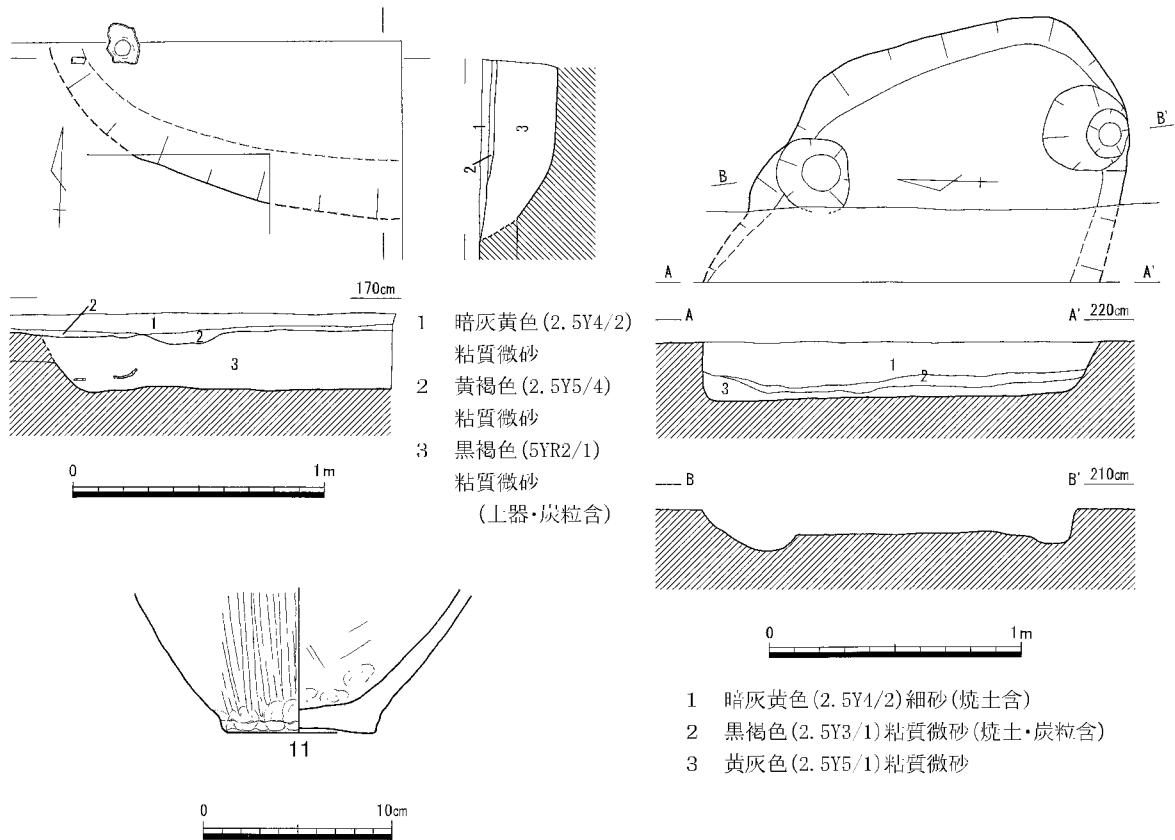
調査区北東隅で検出された遺構で、全体の形態は不明であるが、ここでは土壙と判断した。南北71cm以上、東西140cm以上を測る。遺構内の埋土は、周囲の土層(第6図25層)に酷似するが、第2層直下の海拔155cmから掘り込まれている可能性が高いと判断した。深さは22cmを測り、底面はほぼ平坦である。この底面西側で、底部を下にした状態の壺11が出土した。土層や遺物から、遺構の時期は弥生時代前期と思われる。(柴田)

土壙2 (第7・11図、図版4-1)

調査区北西隅で検出された土壙である。西側部分は調査区外にのびるが、平面形は楕円形と推測される。長さ150cm以上、幅135cm、深さは22cmを測る。底面は平坦であるが、南北2か所において深さ5~7cm程度の円形の浅い窪みを確認した。この窪み内の埋土にも、第2層が認められた。出土遺物は認められなかったが、遺構の時期は弥生時代後期の可能性がある。(柴田)

土壙3 (第7・12図、図版4-2)

調査区北東部で検出された土壙で、平面形は円形である。径73cmで深さは16cmを測り、底面はほぼ平坦である。遺構内埋土の第1層には、小礫が多く含まれている。明確な時期を示す遺物は認められ



第11図 土壙1・2 (1/30)・土壙1出土遺物 (1/4)

ないが、遺構の時期は弥生時代後期の可能性がある。

(正木)

土壌4 (第7・12図)

調査区中央部東隅で検出された土壌である。南側は調査区外にのびており、全体の形態は不明である。東西137cm、南北58cm、深さ17cmを測り、底面はほぼ平坦である。遺構内埋土から、壺12が出土しており、これらから遺構の時期は弥生時代後期前葉と考えられる。

(正木)

3 溝

溝1 (第7・13図、図版4-3・5-1・6)

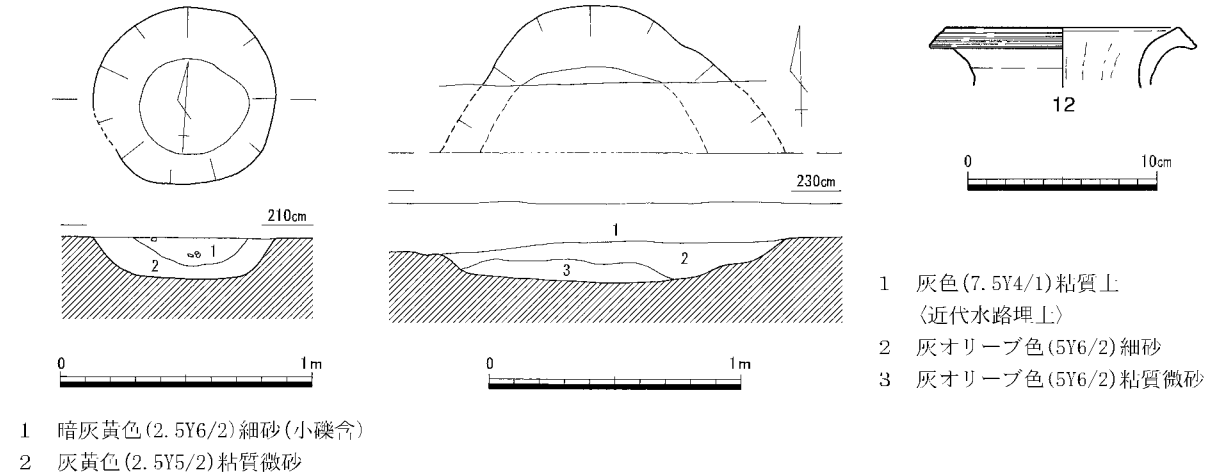
調査区東部で検出された溝で、北東-南西方向にのびる。断面形は箱形を呈する。検出面での幅は41cm、深さは9cmを測る。南西方向の調査区では検出されなかった。溝内からは、甕13、高杯14が出土した。これらから、遺構の時期は弥生時代後期中葉と思われる。

(柴田)

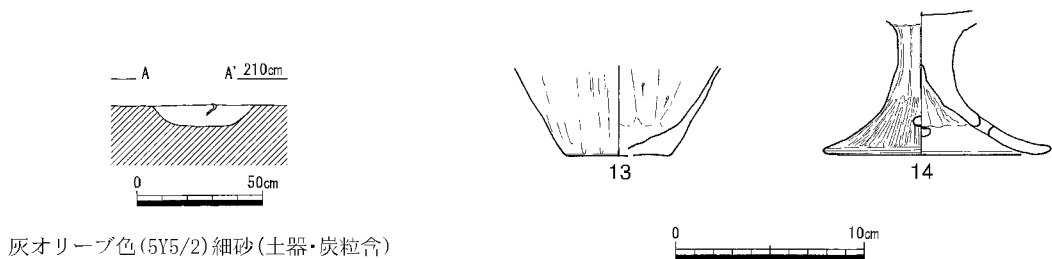
4 水田

水田1 (第6・14図、図版5-2)

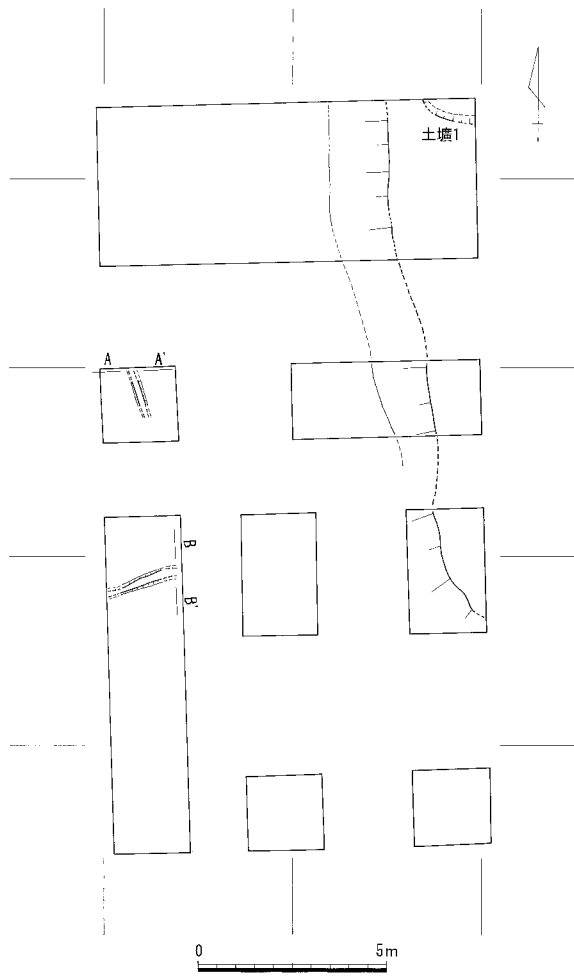
海拔156cmで微高地が検出され、そこから西に向かって低くなる部分が水田1である。海拔126cmで南北方向の畦畔、海拔129cmで東西方向の畦畔を確認した。田面を覆う土層は、比較的黒味が弱く、砂質あるいは砂層のため畦畔の検出は容易であった。南北方向の畦畔は、幅20~26cm・高さ3cm、東



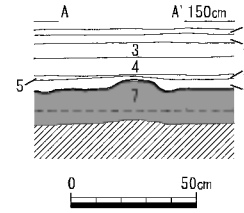
第12図 土壌3・4 (1/30)・土壌4出土遺物 (1/4)



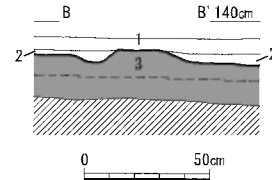
第13図 溝1断面図 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第14図 水田1 (1/200・1/30)



- 1 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粘質微砂
- 2 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 粘質微砂
- 3 黄褐色 (2.5Y5/4) 粘質微砂
- 4 黄褐色 (2.5Y5/4) 粘質微砂
- 5 灰色 (5Y5/1) 粘質微砂
- 6 黒褐色 (10YR3/2) (細砂混)
- 7 黒色 (10YR2/1) 粘質微砂

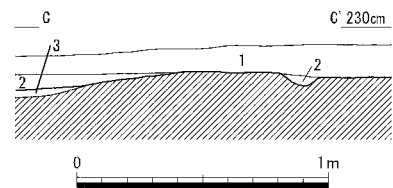


- 1 黄褐色 (2.5Y5/4) 粘質微砂
- 2 黒褐色 (10YR3/2) (細砂混)
- 3 黒色 (10YR2/1) 粘質微砂

西方向の畦畔は、幅25～34cm・高さ5cmを測る。これから判断すると、田面は、南北10m以上、東西6～7mの長方形と推測される。耕作土と考える層は、田面以下8cm程度までが非常に黒味が強いが、漸次的に下層の黒味が弱くなるため、明確な2つの層とはしなかった。時期を示す遺物は確認できないが、土層等から弥生時代前期と考えられる。なお、間層を挟んで上層（第14図A断面4層、B断面1層）も前期水田層の可能性はある。（柴田）

水田2（第6・7・15図、図版5-3）

海拔212～242cmの土層（第6図第6層）は水田層とみられ、調査区全体で確認された。この層の間には少なくとも2層の明瞭な鉄分沈着が認められる。古墳時代以降の遺物はこの層から出土しており、次項に掲載している。調査区南部において、第15図第1層（第6図第6層に同じ）を海拔212cmまで除去した段階で、東西方向にのびる第6図第12層から成る面を認めた。この時点で南北に残った第15図第2層は、第1層に酷似するが、これにより北側で高さ2～3cm、南側で高さ7cmを測る畦畔状の高まりが検出された。南側のみで下層に洪水等に由来する可能性のある第3層が確認されており、少



- 1 黄褐色 (2.5Y5/3) 粘質微砂
- 2 黄褐色 (2.5Y5/3) 粘質微砂
- 3 灰白色 (7.5Y7/1) 細砂

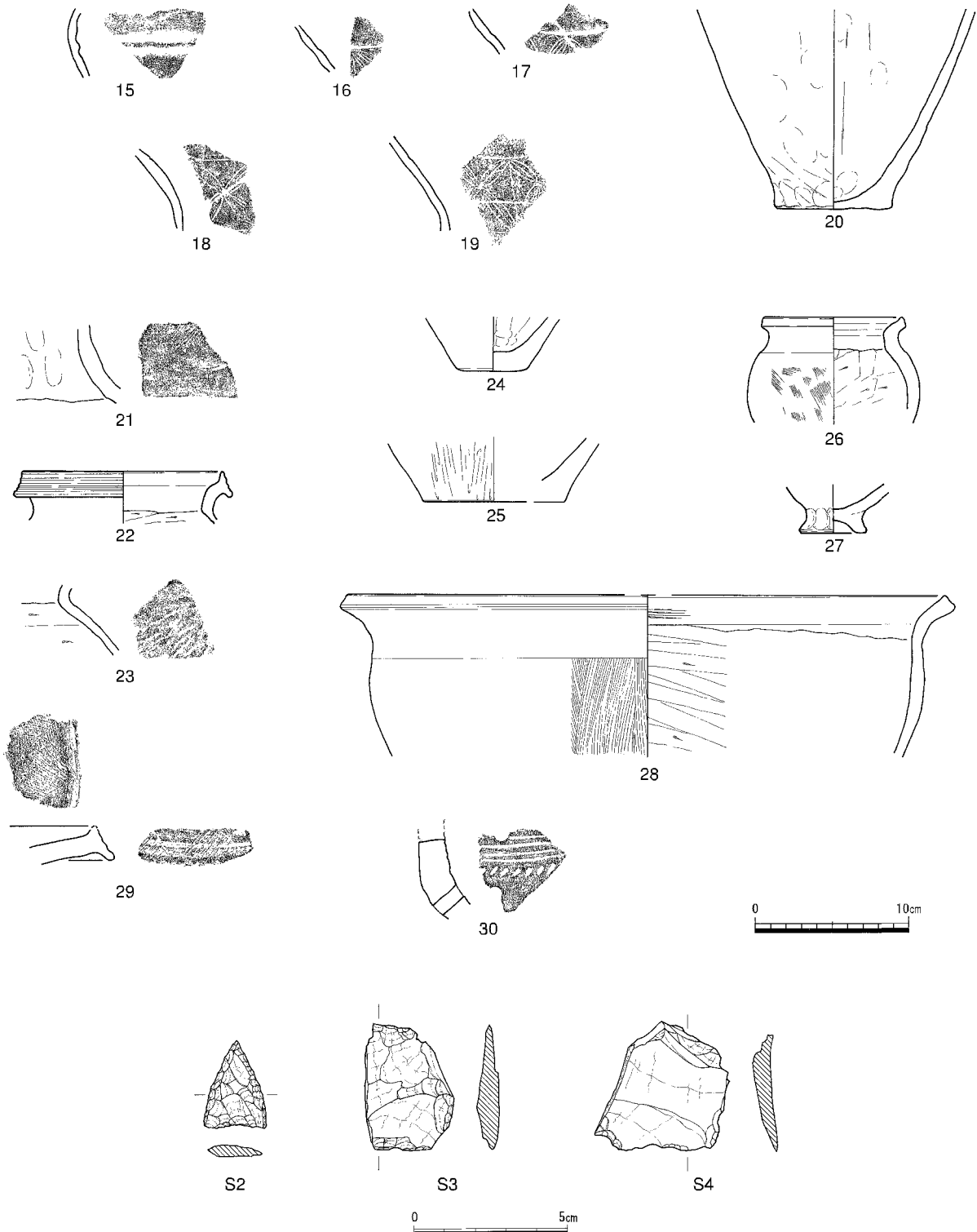
第15図 水田2断面図 (1/30)

なくとも開田時には南の方が低い地形であったと考えられる。

(柴田)

5 その他の遺構・遺物

これまでに詳述した遺構以外に、柱穴や溝が検出されている。柱穴の埋土内には、時期を判断できる遺物は確認できないが、古墳時代以降の遺物を含まない点や掘立柱建物1などと類似する埋土であ



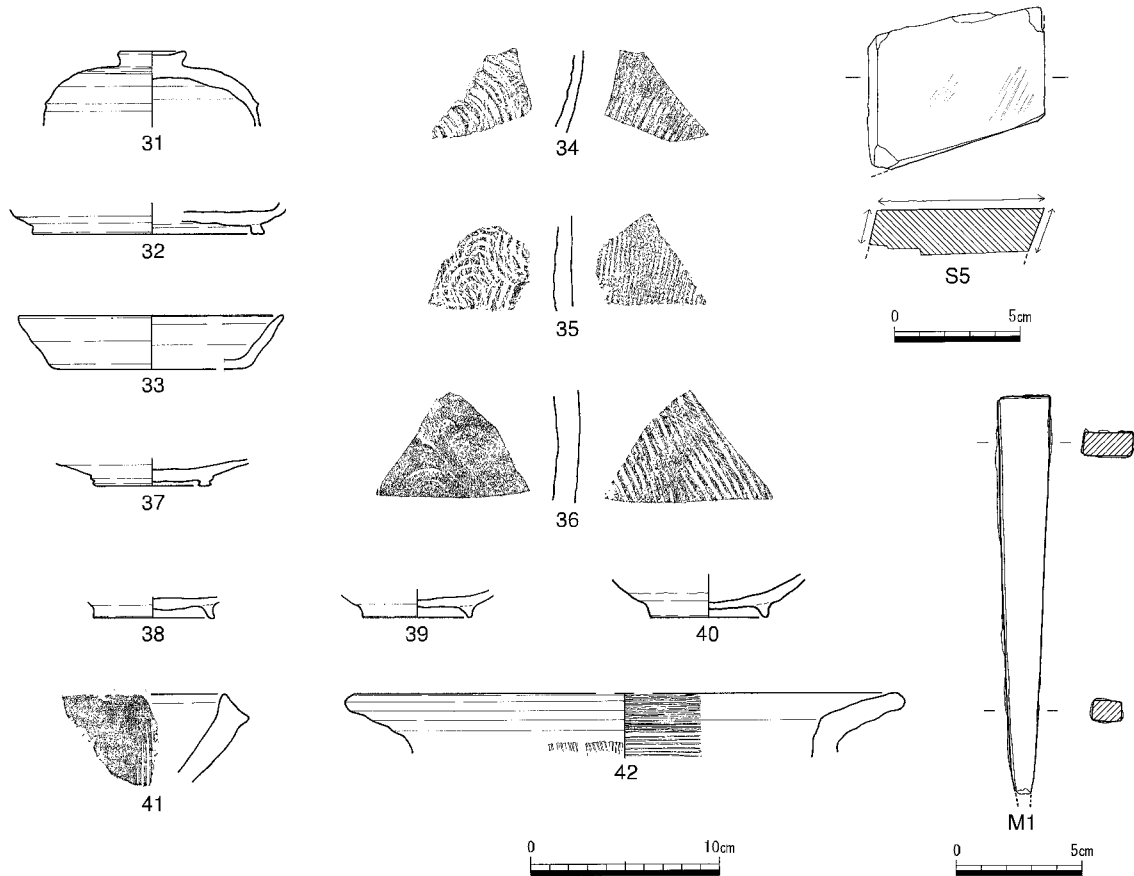
第16図 その他の遺物① (1/4・1/2)

る点などから弥生時代に属する遺構と思われる。調査区中央で確認された東西方向にのびる溝は、旧陸軍練兵場造成時に埋められたものである。海拔250cm前後で検出され、幅は80~100cmを測る。調査区内では掘り方北側のみが認められ、そこでの最深部は海拔210cmであった。この溝の西方には、第二次確認調査のT41で検出された東西方向の石組水路（『津島遺跡5』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』181 2004）があり、両者とも条里の坪境となる可能性がある。

遺物は整理箱で4箱出土した。ここに掲載する遺物は、弥生時代前期の包含層及び水田層（第6図第23・25層）から出土したものと、古代~中世（第6図第6層）と考えている水田層から出土したものである。土器28点、石製品4点、金属器1点を掲載した。

弥生時代の遺物としては、前期の壺15~19・甕20と石器S2~4、後期の壺21・甕22~25・鉢26・28・台付鉢27・器台29・30を掲載した。15は頸部で、屈曲部に突線が施されている。内外面にヨコ方向のヘラミガキが認められる。16~19は肩部で、同一個体の可能性もある。ヨコ方向の沈線2本の間に木葉文を配し、さらにそれはタテ方向の沈線で分割されている。21は頸部で、外面に鋸歯文が施されている。23は摩滅が著しいが、外面にタタキ目が認められる。29は上下に拡張した口縁部と上面に鋸歯文が施される。30は沈線文と列点文の上下に円形のスカシ孔が施される。

古墳時代以降の遺物としては、須恵器31~36、緑釉陶器37、土師器38~40・42、備前焼41、石製品S5、金属器M1を掲載した。31は古墳時代中期の有蓋高杯の蓋で、32・33は古代の杯である。37は表面の摩滅が著しく、釉薬が剥落している。38~40は土師質高台付碗である。S5は細粒砂岩製の砥石である。M1は馬鍬の歯の可能性があり、古代~中世と考える水田層から出土した。（柴田）



第17図 その他の遺物② (1/4・1/3)

第3節 小結

今回の調査では、新たに弥生時代前期の微高地が海拔156cmで確認され、なおかつ、遺構が検出された点が特筆される。これまでの調査で、総合グラウンド内に弥生時代前期の微高地が点在することが明らかにされており、その海拔は170～200cmである。また、例外を除けば周囲の水田より30～40cm高いことも判明している。本例は海拔高こそ低いが、西の水田1との比高が約30cmとなり、これまでの例と共通する。では、この微高地がどのような形態であるかを推測したい。今回の調査区周辺では、水田が確認されているが、確実な微高地は未確認である。ただし、調査区から60m南東に位置するT52で確認されている、南西方向に低くなる「水田層」が注目される。これは、高い地点で海拔175cm、低い地点で海拔140cmを測り、かなりの高低差である。これが、本来の状態であると仮定すると、高い部分は微高地と考えることも可能である。この場合、今回検出した微高地の肩口が、南東方向へのびることを重視すると、北西から南東に細長い微高地形態を推測できる。

次に、注目される点は、弥生時代後期の遺構が確認されたことである。確認調査では、T52・53付近からT40にかけて集落域が確認され、T40付近は縁辺部であると考えられたが、今回掘立柱建物や土壙等が検出された。これによって、集落域がひろがる可能性が高まったと思われる。

また、旧陸軍練兵場の造成時に埋められた溝や、それ以前の水田2で検出された畦畔状の高まり等は、当地の条里を考える上で注目される。(柴田)

※確認調査の成果は、「津島遺跡5」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』181 岡山県教育委員会 2004 に報告されている。

表2 土器観察表

掲載番号	掲載図番号	出土遺構名等	種別	器種	計測値 (cm)			色調	胎土	焼成	状態	実測番号	形態・手法の特徴など
					口径	底径	器高						
1	第9図	掘立柱建物1P2	弥生	壺	15.0			にぶい黄褐色(10YR7/4)	1.5mm以下の砂粒長石・石英・ウンモ(中)	良好	口縁部1/3	31	
2	第9図	掘立柱建物1P3	弥生	甕	20.0			橙色(7.5YR6/6)	1mm以下の砂粒長石(中)・石英(多)・角閃石(少)	良好	口縁部1/9	10	
3	第9図	掘立柱建物1P1	弥生	壺		4.6		にぶい黄褐色(10YR7/4)	1mm以下の砂粒長石・石英・角閃石(少)	良好	底部1/4	35	
4	第9図	掘立柱建物1P3	弥生	高杯	22.2			灰黄褐色(10YR5/2)	0.5mm以下の砂粒長石・石英・ウンモ(多)	良好	口縁部1/10	11	
5	第9図	掘立柱建物1P3	弥生	高杯				にぶい黄褐色(10YR5/3)	0.5mm以下の砂粒長石・石英・ウンモ(多)	良好		12	
6	第10図	掘立柱建物1P5	弥生	壺	12.5			にぶい黄褐色(10YR7/3)	2.5mm以下の砂粒長石・石英・ウンモ(中)・角閃石(少)	良好	口縁部3/4	2	肩部上段鋸歯文約1/2周
7	第10図	掘立柱建物1P5	弥生	甕	16.6			にぶい黄褐色(10YR7/4)	1mm以下の砂粒長石・石英(中)・ウンモ(僅)	良好	口縁部1/8	4	
8	第10図	掘立柱建物1P5	弥生	高杯	20.7			橙色(7.5YR6/6)	1.5mm以下の砂粒長石・石英・ウンモ(少)	良好	杯部1/2	3	
9	第10図	掘立柱建物1P5	弥生	甕		5.6		にぶい褐色(7.5YR6/4)	1.5mm以下の砂粒長石・石英・ウンモ・角閃石(中)	良好	底部1/4	32	
10	第10図	掘立柱建物1P5	弥生	壺		10.6		にぶい黄褐色(10YR7/4)	4mm以下の砂粒長石・石英・ウンモ(中)	良好		1	
11	第11図	土壙1	弥生	壺		8.0		にぶい黄褐色(10YR7/2)	5.5mm以下の砂粒長石・石英・ウンモ(多)	良好		37	
12	第12図	土壙4	弥生	壺	12.2			にぶい黄褐色(10YR7/4)	3mm以下の砂粒長石・石英・ウンモ(多)	良好	口縁部1/3	13	
13	第13図	溝1	弥生	甕		5.3		灰黄褐色(10YR6/2)	1mm以下の砂粒長石・石英(多)	良好	底部1/5	21	
14	第13図	溝1	弥生	高杯		11.3		にぶい褐色(7.5YR7/4)	0.5mm以下の砂粒長石・石英(中)・角閃石(少)	良好		29	
15	第16図	包含層	弥生	壺				にぶい黄褐色(10YR6/3)	1mm以下の砂粒長石・石英(多)	良好		40	突帯
16	第16図	包含層	弥生	壺				にぶい黄褐色(10YR6/3)	1mm以下の砂粒長石・石英(多)	良好		39	沈線、木葉文
17	第16図	包含層	弥生	壺				にぶい黄褐色(10YR6/3)	1mm以下の砂粒長石・石英(多)	良好		38	沈線、木葉文
18	第16図	包含層	弥生	壺				にぶい黄褐色(10YR6/3)	1mm以下の砂粒長石・石英(多)	良好		42	沈線、木葉文
19	第16図	包含層	弥生	壺				にぶい黄褐色(10YR6/3)	1mm以下の砂粒長石・石英(多)	良好		41	沈線、木葉文

掲載番号	掲載図番号	出土遺構名等	種別	器種	計測値 (cm)			色調	胎土	焼成	状態	実測番号	形態・手法の特徴など
					口径	底径	器高						
20	第16図	包含層	弥生	甕		7.7		灰黄褐色(10YR6/2)	5mm以下の砂粒 長石・石英(多)	良好		36	
21	第16図	その他	弥生	壺				灰白色(2.5Y8/1)	1mm以下の砂粒 長石・石英(中)	良好		9	
22	第16図	その他	弥生	甕	12.8			にぶい黄褐色(10YR6/3)	1mm以下の砂粒 長石・石英(多)	良好	口縁部1/5	14	
23	第16図	その他	弥生	甕				灰黄色(2.5Y7/2)	1mm以下の砂粒 長石・石英(多)・ウンモ(中)	良好		15	外面平行タタキ 内面ヘラケズリ
24	第16図	その他	弥生	甕		4.5		にぶい橙色(7.5YR6/4)	4mm以下の砂粒 長石・石英(多)・ウンモ(少)	良好		33	
25	第16図	その他	弥生	壺		9.0		灰黄色(2.5Y7/2)	1mm以下の砂粒 長石・石英(多)	良好	底部1/4	22	
26	第16図	その他	弥生	鉢	8.9			にぶい橙色(7.5YR6/4)	3mm以下の砂粒 長石・石英(多)	良好	口縁部~胴部1/6	20	
27	第16図	その他	弥生	台付鉢		4.2		灰白色(2.5Y8/1)	2mm以下の砂粒 長石・石英(多)・ウンモ(少)	良好		5	
28	第16図	その他	弥生	鉢	38.2			浅黄色(2.5Y7/3)	1mm以下の砂粒 長石・石英(中)・ウンモ・角閃石(少)	良好	口縁部1/10以下	34	
29	第16図	その他	弥生	器台				浅黄色(2.5Y7/3)	0.5mm以下の砂粒 長石・石英・ウンモ・角閃石(中)	良好		8	
30	第16図	その他	弥生	器台				にぶい黄褐色(10YR7/4)	1mm以下の砂粒 長石・石英(中)・ウンモ(少)	良好		28	
31	第17図	その他	須恵器	高杯蓋				灰色(N6/)	1.5mm以下の砂粒 長石・石英(少)	良好	天井部1/4	27	
32	第17図	水田2	須恵器	高台付杯		12.8		灰白色(N7/)	2mm以下の砂粒 長石(多)	良好		18	
33	第17図	水田2	須恵器	杯	13.9	10.8	2.9	灰白色(N7/)	1mm以下の砂粒 長石(少)	良好		19	
34	第17図	水田2	須恵器	甕				灰白色(N7/)	0.5mm以下の砂粒 長石(僅)	良好		30	
35	第17図	水田2	須恵器	甕				青灰色(5B6/1)	1.5mm以下の砂粒 長石(中)	良好		16	
36	第17図	水田2	須恵器	甕				灰白色(N7/)	1mm以下の砂粒 長石(少)	良好		17	
37	第17図	その他	緑釉陶器	皿		5.4		灰色(7.5Y6/1)	精良	良好	高台1/4	26	10c前半・京都沿西か
38	第17図	その他	土師器	高台付碗		6.2		灰白色(10YR8/2)	2mm以下の砂粒 長石・石英(多)	良好	高台1/4	25	
39	第17図	その他	土師器	高台付碗		5.6		灰白色(2.5Y8/1)	1.5mm以下の砂粒 長石(中)・石英(多)	良好	高台1/5	24	
40	第17図	その他	土師器	高台付碗		6.0		灰白色(2.5Y8/1)	1.5mm以下の砂粒 長石・石英(中)	良好	高台1/3	6	
41	第17図	その他	備前焼	播鉢				灰白色(N7/)	3.5mm以下の砂粒 長石(中)	良好		7	
42	第17図	その他	土師器	甕	28.4			灰褐色(7.5YR4/2)	5mm以下の砂粒 長石・石英・ウンモ(多)	良好	口縁部1/11	23	

表3 石製品一覧表

掲載番号	掲載図番号	出土遺構名等	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	石材	時期	実測番号	備考
				最大長	最大幅	最大厚					
S 1	第9図	掘立柱建物1 P 1		190.0	140.0	68.0	2950	流紋岩	弥生	6	
S 2	第16図	包含層	石鏃	28.0	20.0	4.0	1.98	サヌカイト	弥生	1	
S 3	第16図	水田1	楔形石器	29.0	41.0	7.0	9.28	サヌカイト	弥生	5	
S 4	第16図	包含層	剥片	43.5	41.5	11.0	13.79	サヌカイト	弥生	4	使用痕
S 5	第17図	包含層	砥石	64.0	70.0	17.5	116.40	細粒砂岩		7	

表4 金属製品一覧表

掲載番号	掲載図番号	出土遺構名等	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	材質	時期	実測番号	備考
				最大長	最大幅	最大厚					
M 1	第17図	水田2	馬鍬?	157	20.5	10.0	107.83	鉄	中世?	1	

表5 新旧遺構名対照表

掲載遺構名	旧地区名	旧遺構名	掲載遺構名	旧地区名	旧遺構名	掲載遺構名	旧地区名	旧遺構名
掘立柱建物1 P 1	1区	P 4	土壇1	1区	No. 8 土壇	水田1		水田1・前期水田
掘立柱建物1 P 2	1区	P 1	土壇2	1区	No. 5 土壇	水田2		中世水田
掘立柱建物1 P 3	1区	No. 2 土壇	土壇3	1区	No. 4 土壇			
掘立柱建物1 P 4	1区	P 6	土壇4	1区	No. 3 土壇			
掘立柱建物1 P 5	1区	No. 7 土壇	溝1	2区	No. 6 溝			

付載 津島遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

津島遺跡（岡山県岡山市いずみ町に所在）が位置する岡山平野は、笹ヶ瀬川、旭川、吉井川などを初めとする河川の沖積作用により形成された平野である。遺跡近辺は、自然堤防状の微高地や後背湿地、埋没流路などが複雑に入り組む微地形が形成されている。津島遺跡の調査では、縄文時代後・晩期以降の水田層を対象とした自然科学調査が実施されており、周辺の堆積環境の変遷や稲作の消長を含めた植生変遷に関する情報が蓄積されつつある。当社においても、植物珪酸体や珪藻化石を中心とした調査をこれまで実施し、稲作の消長を含めた環境変遷について検討してきた。今回は、弥生時代前期水田耕作土およびその上位の堆積層について花粉・植物珪酸体分析を実施する。

1 試料

試料は、調査区南西壁より採取された土壌4点である（図1、以下の土層番号は本文第6図と同一）。分析試料は、14層・17層・20層・23層の4層準から採取された4点である（試料A～D）。試料の層相は、試料A（14層）が灰色を呈するシルト質極細粒砂からなり、生物擾乱が及んでいる。試料B（17層）は、暗灰黄色を呈するシルト質極細粒砂からなり、生物擾乱が及んでいる。試料C（20層）は黄灰色を呈する細粒砂・シルト混じり極細粒砂からなる。土壌構造が発達し、2mm程度の大きさの揃った集合体が確認される。試料D（23層）は黒色を呈する腐植質に富むシルト質極細粒砂からなる。生物擾乱が著しい。

2 分析方法

（1）花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛：比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸9，濃硫酸1の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。

結果は同定・計数結果の一覧表、および主要花粉化石群集の層位分布図として表示する。

（2）植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム，比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリユラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸

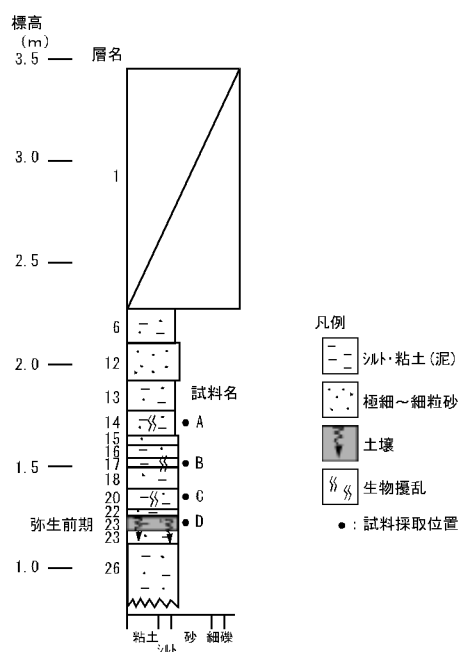


図1 分析試料採取位置

体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤（2004）の分類に基づいて同定・計数する。

結果は、検出された植物珪酸体の種類と個数の一覧表で示す。また、植物珪酸体の産状の層的变化から稲作の可能性や古植生について検討するために、各種類の出現率の層的变化を図示する。各種類の出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求める。

なお今回は、各分類群の含量の測定も試みた。分析の際に分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量、検鏡に用いたプレパラートの数や検鏡した面積を正確に計量し、堆積物 1 g あたりの植物珪酸体含量（同定した数を堆積物 1 g あたりの個数に換算）を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。有効数字の関係から、計算結果は100を単位として丸めている。また、計算上100個体以下となった場合には「<100」と表示する。

3 結果

(1) 花粉分析

結果を表1に示す。シダ類孢子が大部分を占め、木本花粉や草本花粉は検出数が少ない。種類構成をみると、木本類はモミ属、ツガ属、マツ属など針葉樹花粉が検出され、草本類ではイネ科等が検出される。産出する花粉化石の保存状態は悪く、花粉外膜が薄くなっているもの、物理的に破壊されているものなどが確認される。

表1 花粉分析結果

種 類	層名・試料名			
	14層 A	17層 B	20層 C	23層 D
木本花粉				
モミ属	-	1	-	3
ツガ属	-	-	-	7
マツ属	-	-	2	5
コウヤマキ属	-	-	1	-
ヤマモモ属	-	-	-	2
カバノキ属	-	1	-	-
ハンノキ属	-	4	-	-
ブナ属	-	3	-	-
コナラ属コナラ亜属	-	-	1	-
コナラ属アカガシ亜属	1	1	1	9
草本花粉				
イネ科	3	2	2	23
カヤツリグサ科	-	-	-	7
サナエタデ節-ウナギツカミ節	-	-	1	6
アカザ科	1	-	1	-
ナデシコ科	-	1	-	2
アブラナ科	-	-	-	1
バラ科	-	1	-	-
ネナシカズラ属	-	-	-	1
ヨモギ属	2	1	-	11
キク亜科	-	1	4	3
不明花粉	1	4	7	10
シダ類孢子				
ヒカゲノカズラ属	2	3	1	8
イノモトソウ属	5	16	7	4
他のシダ類孢子	338	232	135	1110
合 計				
木本花粉	1	10	5	26
草本花粉	6	6	8	54
不明花粉	1	4	7	10
シダ類孢子	345	251	143	1122
総計（不明を除く）	352	267	156	1202

(2) 植物珪酸体分析

検鏡結果を表2・3、群集組成の層的变化を図2・3に示す。今回は、既存の結果との比較検討を行う関係上、植物珪酸体量を基数とする相対比と、堆積物に対する個数を定量的に表したものの2種類で表した。

表2 植物珪酸体分析結果 (個数)

種 類	層名・試料名			
	14層 A	17層 B	20層 C	23層 D
イネ科葉部短細胞珪酸体				
イネ族イネ属	13	10	7	-
タケ亜科	77	53	39	3
ヨシ属	38	21	44	6
ウシクサ族コブナグサ属	20	2	16	3
ウシクサ族ススキ属	13	3	20	14
イチゴツナギ亜科	4	5	7	-
不明キビ型	84	38	94	47
不明ヒゲシバ型	27	18	37	11
不明ダンチク型	18	14	29	17
イネ科葉身機動細胞珪酸体				
イネ族イネ属	50	22	31	6
タケ亜科	34	20	18	10
ヨシ属	23	13	17	7
ウシクサ族	5	3	3	4
不明	41	43	32	24
珪化組織片				
イネ属類珪酸体	5	3	-	1
合 計				
イネ科葉部短細胞珪酸体	294	164	293	101
イネ科葉身機動細胞珪酸体	153	101	101	51
珪化組織片	5	3	0	1
総 計	452	268	394	153

表3 植物珪酸体含量 (個/g)

種 類 試料番号	層名・試料名			
	14層 A	17層 B	20層 C	23層 D
イネ科葉部短細胞珪酸体				
イネ族イネ属	1,100	800	500	-
タケ亜科	6,300	4,300	3,000	<100
ヨシ属	3,100	1,700	3,400	100
ウシクサ族コブナグサ属	1,600	200	1,200	<100
ウシクサ族ススキ属	1,100	200	1,600	300
イチゴツナギ亜科	300	400	500	-
不明キビ型	6,900	3,100	7,300	900
不明ヒゲシバ型	2,200	1,500	2,900	200
不明ダンチク型	1,500	1,100	2,300	300
イネ科葉身機動細胞珪酸体				
イネ族イネ属	4,100	1,800	2,400	100
タケ亜科	2,800	1,600	1,400	200
ヨシ属	1,900	1,100	1,300	100
ウシクサ族	400	200	200	<100
不明	3,400	3,500	2,500	500
珪化組織片				
イネ属類珪酸体	400	200	-	<100
合 計				
イネ科葉部短細胞珪酸体	24,200	13,400	22,800	2,000
イネ科葉身機動細胞珪酸体	12,600	8,300	7,900	1,000
珪化組織片	400	200	0	<100
総 計	37,200	22,000	30,700	3,000

凡例 <100:100個体未満

合計:各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている(100単位にする)

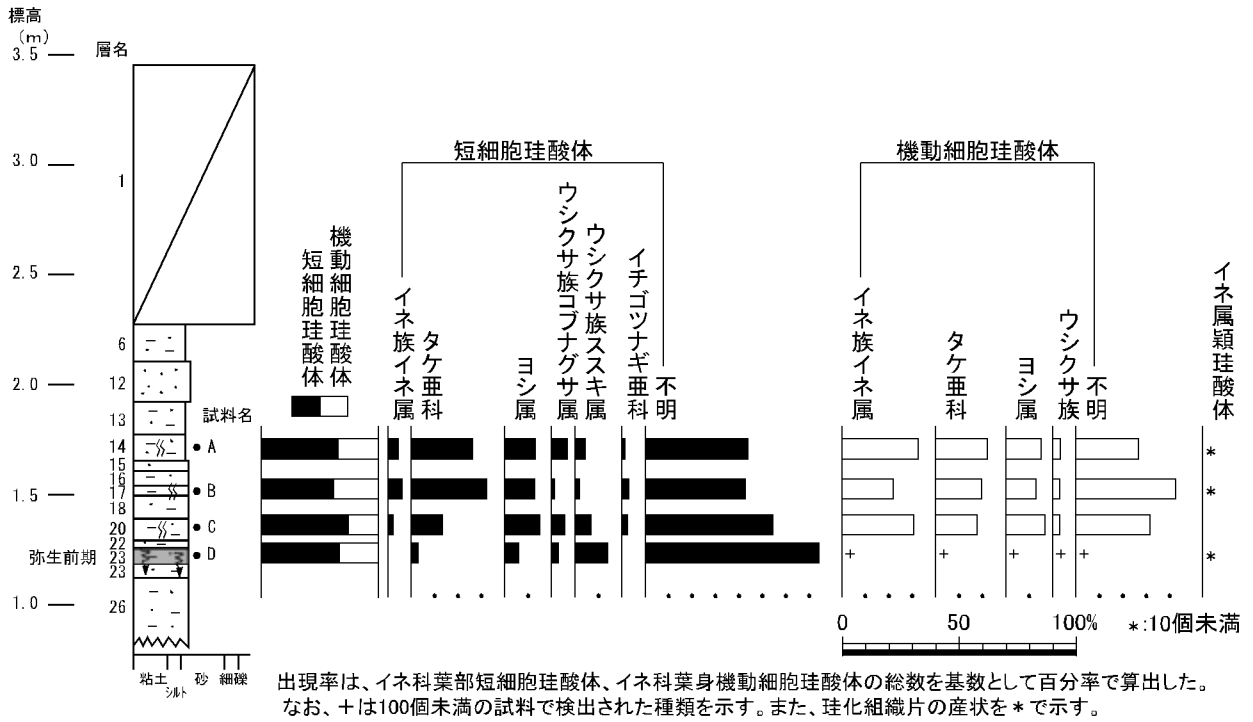


図2 植物珪酸体群集（相対比）

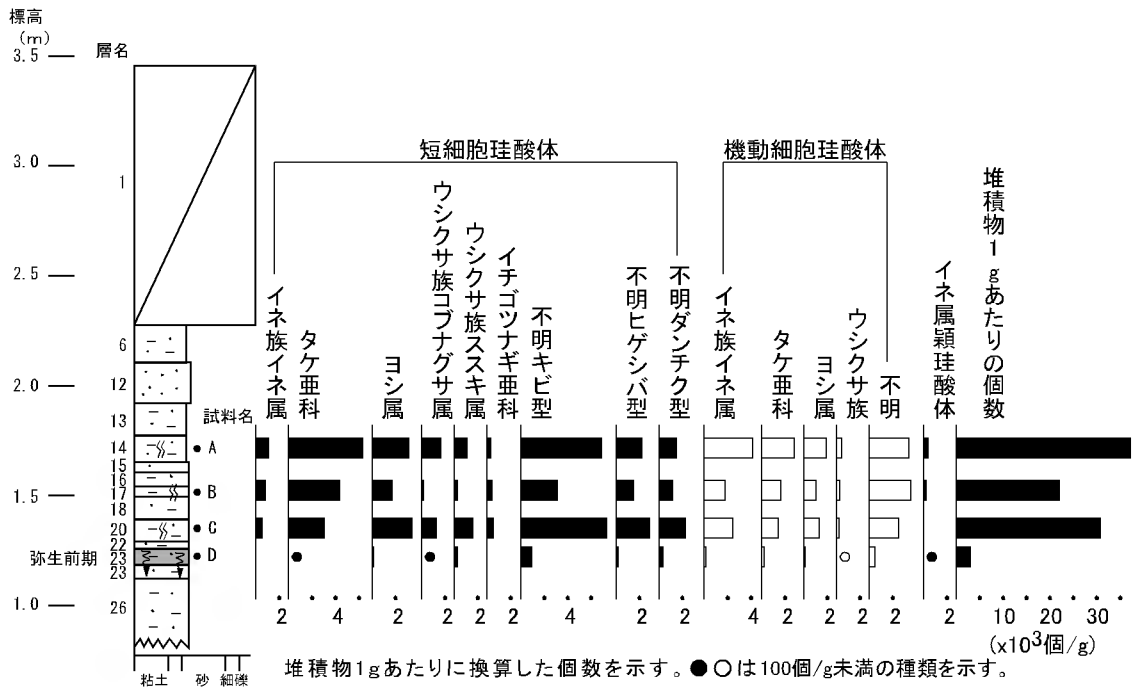


図3 植物珪酸体含量密度の層位変化

各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。

植物珪酸体含量密度は、試料D（23層）で約3,000個/gと少なく、上位の試料C（20層）、B（17層）、A（14層）は30,000個/g前後の密度を示す。栽培植物のイネ属は、短細胞珪酸体が全試料、機動細胞珪酸体が試料CからA、穎珪酸体が試料Cを除いた試料で検出される。機動細胞珪酸体は、試料CからAで産出が目立つ。また出現率と含量は、試料Bで機動細胞珪酸体が減少するものの、試料Aにかけて増加する傾向が見られる。この他には、タケ亜科、ヨシ属、コブナグサ属やススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが検出される。また、タケ亜科とヨシ属の産出が目立つ。

4 考察

（1）周辺植生

津島遺跡の弥生時代前期以降の堆積物に関する花粉分析は、これまでも行われているが（パリノ・サーヴェイ株式会社, 2004；株式会社 古環境研究所, 2004など）、保存状態は全体的に悪い。今回の結果をみても、花粉化石の保存状態は悪く、シダ類孢子や針葉樹の割合が高い傾向にある。花粉化石は、好気的な環境においては、風化・消失すると考えられている（中村, 1967など）。今回の分析層準はいずれも生物擾乱の影響を受けている堆積物であり、20層・23層については土壤構造が発達している。これらのことから、各堆積層の形成期は定常的に水が存在するのではなく、乾湿をくりかえすような状況下におかれていたことが推測される。

堆積物ないし土壤中から抽出した微化石について、各分類群の検出率を求める場合、出現率の測定誤差は二項分布に従うと考えられる。このため、検出数が100個体を下回ると、その測定誤差が±10%の範囲に収まらなくなり（信頼度2σ、出現率50%として計算）、結果の信頼度が悪くなる。また、花粉化石ではシダ類孢子が多いが、これはシダ類孢子が花粉化石に比べ、風化に対する耐性が強いためである（徳永・山内, 1971三宅・中越, 1998など）。したがって、保存が悪い試料においては、計測数を増やし図化させても、結果的に風化に耐性のある種類が高率となるだけで、周辺植生を反映するデータは得られない。このため、今回はこれらの試料について、各分類群の割合を図示することを差し控えた。

既往の本遺跡およびその周辺の分析成果をみると、アカガシ亜属の割合が高く、ヤマモモ属、シイノキ属、シキミ属、センダン属など暖温帯林に特徴的な種類を伴う（三好・多田, 1988；パリノ・サーヴェイ株式会社, 1993；株式会社 古環境研究所, 2004）。三好（1998）によれば、当時（弥生時代前後）の瀬戸内地区の古植生は、カシ類が優勢で、シイノキ属を伴う常緑広葉樹主体の植生であるが、冷涼・多雨化に伴い、針葉樹や落葉樹が若干増加したと考えられている。一方、百間川原尾島遺跡の種実分析結果をみると、トチノキ、オニグルミ、ナラ類など落葉樹が主体である（パリノ・サーヴェイ株式会社, 1995）。遺跡の立地を考慮すれば、丘陵地との林縁部には、トチノキ、オニグルミ、ナラ類をはじめ、花粉化石で検出されるエノキ属－ムクノキ属やニレ属－ケヤキ属など湿地を好む落葉樹を主とした植生であったと思われる。花粉化石で多産している常緑樹林は海岸沿いや山地などに由来すると思われる。今回の花粉分析の結果では、草本植生の詳細は不明だが、植物珪酸体の産状からは、タケ亜科、ヨシ属、ウシクサ族、イチゴツナギ亜科などのイネ科植物が生育していたことがうかがえる。このような組成は、当社がこれまで行ってきた津島遺跡の結果と調和的である（パリノ・サーヴェイ

イ株式会社, 2004)。

(2) 栽培植物のイネ属植物珪酸体の産状について

分析の結果、弥生時代前期水田層とされる23層ではイネ属の機動細胞珪酸体が検出されたものの、その含量密度は少なかった。この層準ではイネ属以外の珪酸体も少なく、全体量は他の層位の1/10以下である。蹴球場内に設けられたトレンチ (T60やT61) や、新体育館予定地内 (J区) で見られた弥生時代前期水田層でも、イネ属の機動細胞珪酸体が少なく、この理由として稲作の期間が短かったことが指摘されている (株式会社古環境研究所, 2004・2005)。今回の分析とは、処理方法や対象となる植物珪酸体が異なることから単純に比較できないものの、上記の例よりも植物珪酸体量が少ないことや、周辺植生に由来するとみられるヨシ属やタケ亜科も少ない点から、T60やT61などとは別の理由が考えられる。植物珪酸体は種類により風化による耐性に違いがあるといわれている (Takachi et al. 2001など) ことから、植物珪酸体の保存が悪い23層の植物珪酸体群集を定量的に判断することは難しい。周辺域の調査では、T38、T39、T40、T42、T43等で弥生時代前期水田層の植物珪酸体分析が実施されており (パリノ・サーヴェイ株式会社, 2004)、当時の稲作が推定されている。今回稲籾に由来する珪酸体や機動細胞珪酸体が少量検出されることや、周辺の成果とも考え合わせると、23層が当時水田耕土として利用されていた可能性がある。植物珪酸体は、土壌化の過程の中で分解することが指摘されているほか (近藤, 1988など)、乾湿を繰り返すような場所においては、分解されやすいと考えられている (江口, 1994, 1996)。23層は水田層であることからすると、耕作に伴う攪乱や環境の変化 (乾湿を繰り返すなど) により、植物珪酸体が残りにくい環境下におかれた可能性があり、そのため植物珪酸体が溶解したと推測される。また周囲のT40、T42、T43では弥生時代前期水田層でもイネ属が認められない層位があった。このように、水田層とされる層位でイネ属の産出にはバラツキが見られた要因については、水田耕作による人為的攪乱の可能性が指摘されている (パリノ・サーヴェイ株式会社, 2004)。

20層より上位ではイネ属機動細胞珪酸体の産出が目立ち、出現率が30%前後であった。今回の調査区の周囲でも高い出現率でイネ属が検出されており、本地点でも弥生時代前期以降に稲作が行われていたことが示唆される。過去の分析例 (パリノ・サーヴェイ株式会社, 2004) をみると、水田層よりもその上下層の方にイネ属が多く検出される地点もある。これは、前述したように耕作に伴う環境の変化 (耕作による攪乱、土壌化など) に伴う植物珪酸体溶解の可能性が示唆されるが、堆積物中における植物珪酸体の挙動に関しては不明な部分も多く、今後情報を蓄積し、再検討を行ってきたい。

引用文献

江口 誠一, 1994, 沿岸域における植物珪酸体の分布 千葉県小櫃川河口域を例にして. 植生誌研究, 2, 19-27.

江口 誠一, 1996, 沿岸域における植物珪酸体の風化と堆積物のpH値. ペドロジスト, 40, 81-84.

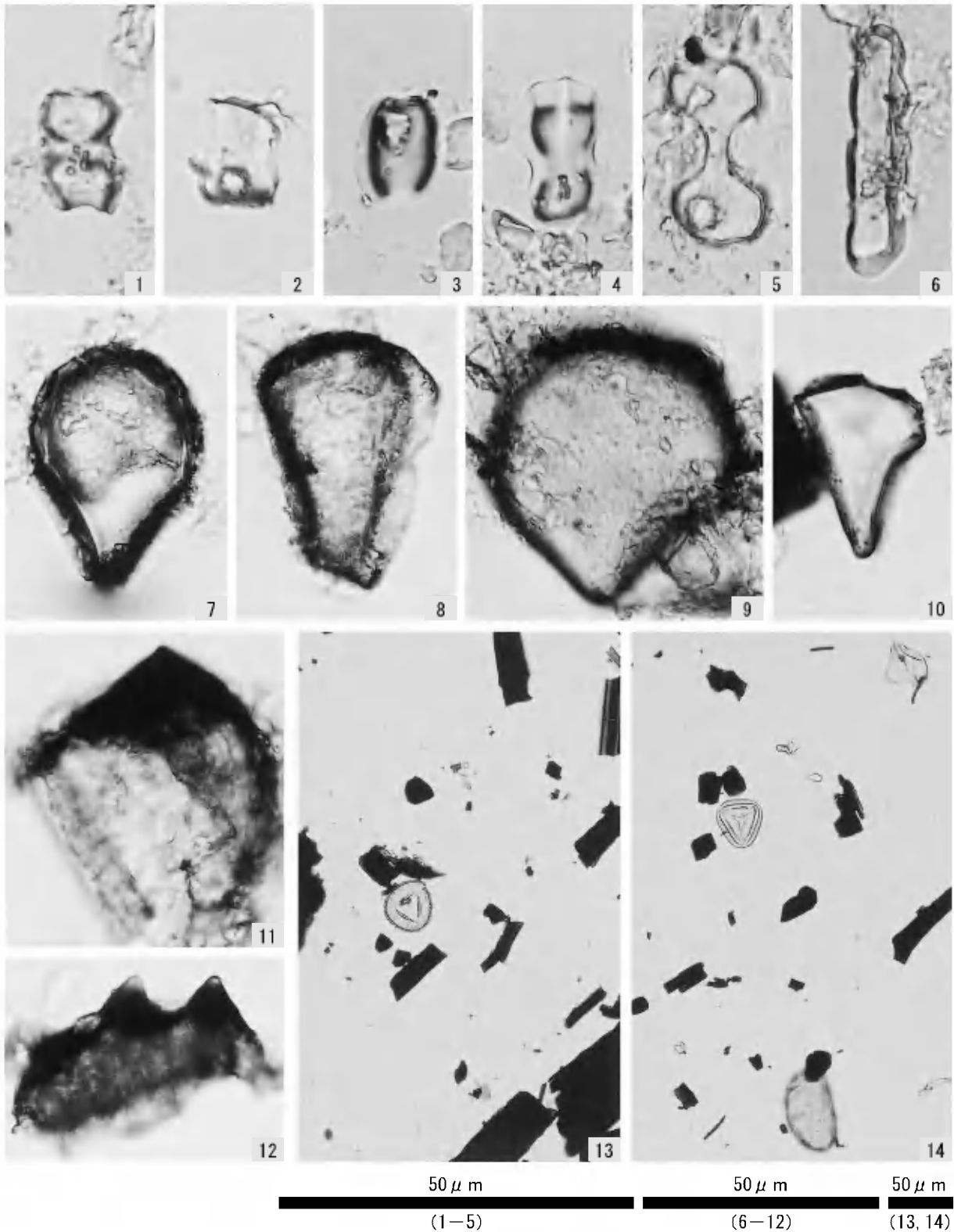
株式会社 古環境研究所, 2004, 津島遺跡 第三次確認調査の自然科学分析. 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 181集「津島遺跡 5 岡山県総合グラウンド第二次・第三次確認調査」, 岡山県古代吉備文化財センター, 185-204.

近藤 練三, 1988, 植物珪酸体 (Opal Phytolith) からみた土壌と年代. ペドロジスト, 32, 189-202.

近藤 練三, 2004, 植物ケイ酸体研究. ペドロジスト, 48, 46-64.

- 三好 教夫・多田 由美子, 1988, 原遺跡(岡山県御津町)と津島江道遺跡(岡山市)の花粉分析. 鎌木義昌先生古稀記念論文集 考古学と関連科学, 鎌木義昌先生古稀記念論文刊行会, 437-444.
- 三好 教夫, 1998, 中国・四国地方の植生史. 図説 日本列島植生史, 安田 喜憲・三好 教夫編, 朝倉書店, 138-150.
- 三宅 尚・中越 信和, 1998, 森林土壌に堆積した花粉・胞子の保存状態, 植生史研究, 6(1), 15-30.
- 中山 至大・井之口 希秀・南谷 忠志, 2000, 日本植物種子図鑑. 東北大学出版会, 642p.
- 中村 純, 1967, 花粉分析. 古今書院, 232p.
- パリノ・サーヴェイ株式会社, 1993, 植物化石分析報告. 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告84 百間川沢田遺跡 3 旭川放水路(百間川)改修工事に伴う発掘調査Ⅷ, 岡山県文化財保護協会, 405-426.
- パリノ・サーヴェイ株式会社, 1995, 百間川原尾島遺跡出土の種実同定. 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告97 百間川原尾島遺跡 4 旭川放水路(百間川)改修工事に伴う発掘調査 X, 岡山県文化財保護協会, 286-289.
- パリノ・サーヴェイ株式会社, 2004, 津島遺跡における弥生時代の古環境解析. 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 181集「津島遺跡 5 岡山県総合グラウンド第二次・第三次確認調査」, 岡山県古代吉備文化財センター, 165-184.
- Takachi CeliaYoshimi・Kondo Renzo・Tsutsuki Kiyoshi, 2001, Opal Phytolith Assemblage and Its Relation with Plant Biomass. *Quaternary Research*, 40, 337-344.
- 徳永 重元・山内 輝子, 1971, 花粉・胞子. 化石の研究法, 共立出版株式会社. 50-73.

図版1 植物珪酸体・花粉分析プレパラート内の状況写真



- | | |
|----------------------|--------------------------|
| 1. イネ属短細胞珪酸体(サンプルA) | 2. タケ亜科短細胞珪酸体(サンプルC) |
| 3. ヨシ属短細胞珪酸体(サンプルA) | 4. コブナグサ属短細胞珪酸体(サンプルA) |
| 5. ススキ属短細胞珪酸体(サンプルA) | 6. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体(サンプルA) |
| 7. イネ属機動細胞珪酸体(サンプルA) | 8. タケ亜科機動細胞珪酸体(サンプルC) |
| 9. ヨシ属機動細胞珪酸体(サンプルA) | 10. ウシクサ族機動細胞珪酸体(サンプルD) |
| 11. イネ属穎珪酸体(サンプルA) | 12. イネ属穎珪酸体(サンプルA) |
| 13. 状況写真(サンプルA) | 14. 状況写真(サンプルB) |

図版 1



1 調査状況（北から）

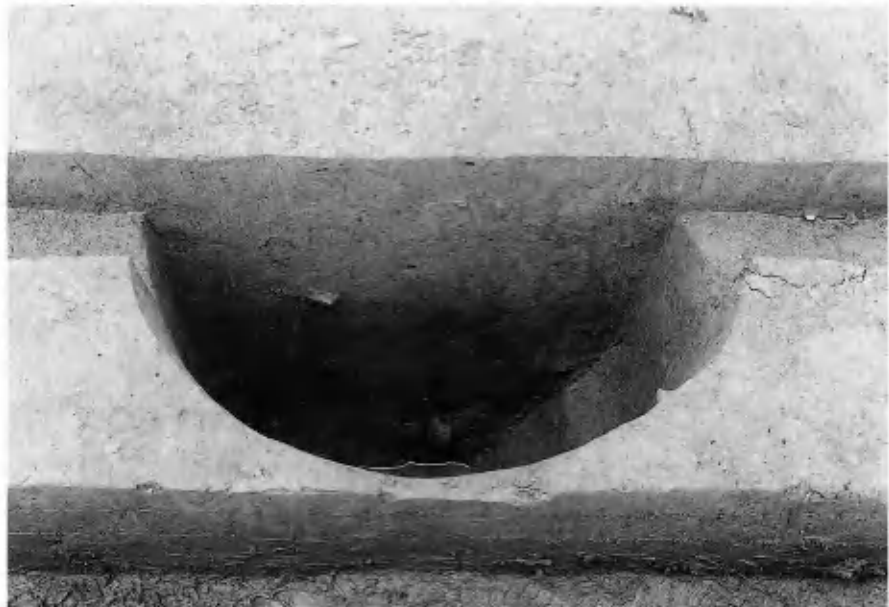


2 調査区西壁断面（南東から）

1 掘立柱建物 1
(北東から)



2 掘立柱建物 1
P 3 断面
(南東から)



3 掘立柱建物 1
P 5 遺物出土状態
(南東から)



図版 3



1 土壙 1 北壁断面
(南から)



2 土壙 1 東壁断面
(西から)



3 土壙 1 遺物出土状態
(南から)

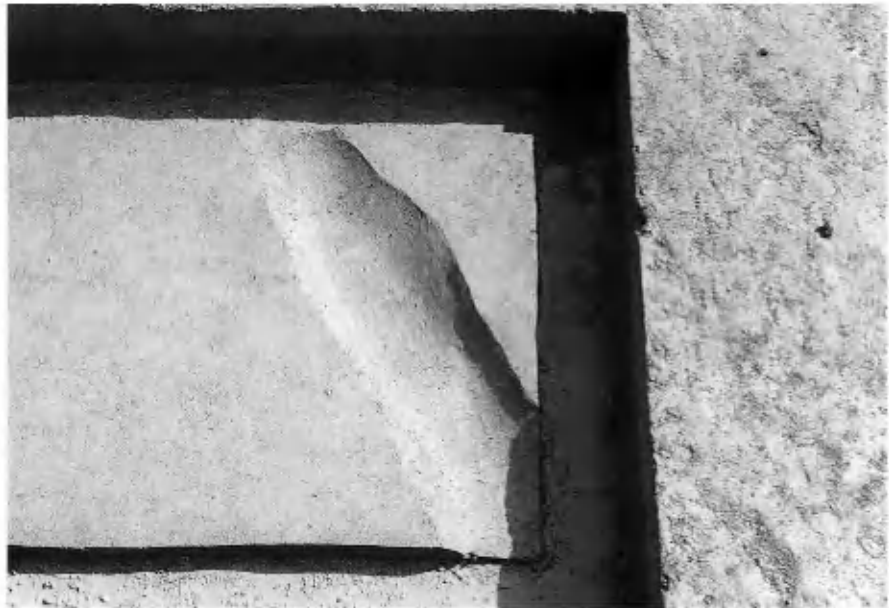
1 土壇 2
(南から)



2 土壇 3 断面
(南から)



3 溝 1
(西から)



図版 5



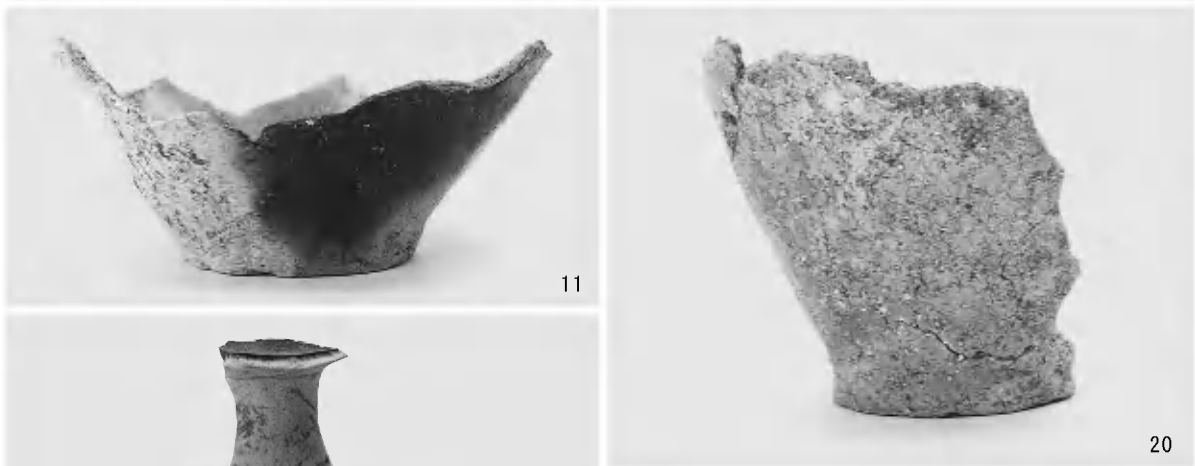
1 溝1断面
(南西から)



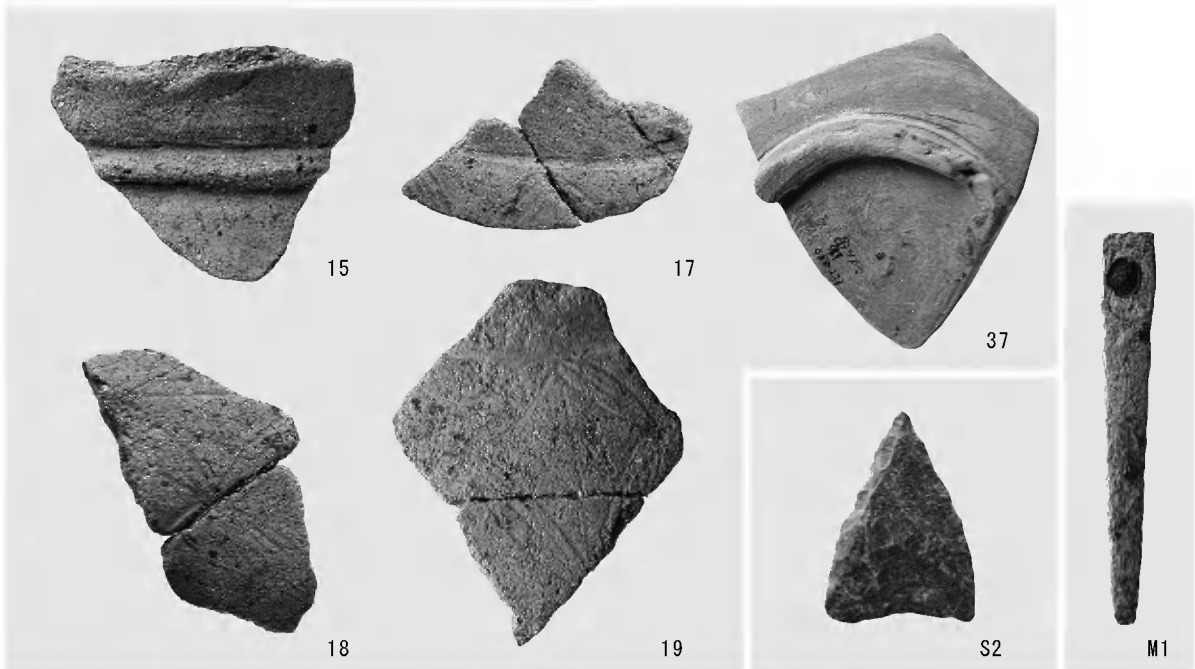
2 水田1 南北畦畔
(南から)



3 水田2
(東から)



6・10 掘立柱建物 1 (P 5)
11 土城 1
14 溝 1
15・17~20・37・S2・M1 その他



出土遺物

報告書抄録

ふりがな	つしまいせき							
書名	津島遺跡7							
副書名	岡山県総合グラウンドテニスコート管理棟（クラブハウス）建築に伴う発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	212							
編著者名	柴田英樹 正木茂樹 平井泰男 岡本泰典							
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター							
所在地	〒701-0136 岡山県岡山市西花尻1325-3 TEL 086-293-3211 URL http://www.pref.okayama.jp/kyoiku/kodai/kodaik.htm							
発行機関	岡山県教育委員会							
所在地	〒700-8570 岡山県岡山市内山下2-4-6 TEL 086-224-2111							
発行年月日	西暦2007年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
つしまいせき 津島遺跡	おかやまけん 岡山県 おかやまし 岡山市 いずみ町 2-1	33201	332011477	34° 40' 55"	133° 55' 22"	2006. 2. 13 ～ 2006. 3. 20	95㎡	岡山県総合 グラウンド テニスコート 管理棟 (クラブハ ウス) 建築
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
津島遺跡	集落 生産	弥生～古墳時代	掘立柱建物1棟、土壇4基、 溝1条、水田		弥生土器、須恵器、石鏃、砥石			
		奈良～室町時代	水田		土師器、須恵器、金属器			
要 約	調査地点は、これまでの調査で弥生時代前期の水田域と考えられていたが、水田とともに微高地の存在が明らかとなった。さらに、弥生時代後期の集落域についても、掘立柱建物や土壇等の遺構が検出され、推定されていた範囲がひろがることとなった。また、古代～中世と思われる水田で検出された東西方向にのびる畦畔状の高まりや近代の溝は、当地の条里を検討する資料である。							

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告212

津島遺跡 7

岡山県総合グラウンドテニスコート管理棟
(クラブハウス) 建築に伴う発掘調査

平成19年3月20日 印刷

平成19年3月31日 発行

編集 岡山県古代吉備文化財センター
岡山市西花尻1325-3

発行 岡山県教育委員会
岡山市内山下2-4-6

印刷 山陽印刷株式会社
岡山市富吉3098-1



本文用紙は古紙配合率100%再生紙を使用しています